

念	五	美	日
展	十	術	立
2	回	会	O
0			
1			
2			
	記	第	B

記念エッセイ集

平成24年4月1日

日立OB美術会

ご挨拶

日立OB美術会会長

山本 衛

一九七二年に日立製作所OBの絵画同好の士が集まり、日立OB美術会と称して発足、翌一九七三年に会員二十三名で初めて第一回展を開催しました。その後、日立グループ全体のOBとそこご家族の皆様の同好会とし、二〇〇二年よりは年一回の開催を春秋年二回の日立OB美術会展にいたしました。

そして、パリをはじめ六回の海外展も開催いたしました。

会創立以来四十年を経過し、お陰様をもちましてここに今春、記念すべき第五十回展を迎える事が出来ましたことは、誠に会員一同ご同慶の至りでございます。

これも偏に永く絵画を愛し続けてご逝去された大先輩、途中ご体調が優れず残念ながら絵筆をとれなくなられて退会された方々等、百五十余名の先輩ご兄弟が永年、会の為にご努力いただいた賜物と衷心より厚く感謝申上げる次第です。

そして、これまで毎回の美術展にお運び賜った大勢のご観覧の皆様には深謝申し上げますとともに、当会委員各位の貴重なる種々のご提案と実行並びに会員皆様のご支援ご協力に併

せて心より厚く御礼申し上げます。

現在、会員数は百二十名の多きを数え、これに類する会は日本企業の中では他に例がなく、本会が最大と言われているようにございます。

これから先も絵画の大好きなOBで、リタイアされてからの生きがいや達成感を味わいたいと考えておられる方々が入会されると思われ、日立OB美術会は益々の大集団になっていくことでしょう。

これからの自分の人生を楽しませる方法——それは、その一つとして絵を描くことと云えるのではないでしょうか。またそれは、心のビタミンにもなるのです。

アクティブ・エイジの我が会員の平均年齢は元気な七十二・二歳です。どうぞ、皆様には呉々もご自愛賜り、益々のご健筆とご活躍をお願い申し上げ、永久に日立OB美術会が発展・盛会あらんことを祈念し、第五十回記念展開催のご挨拶とさせて戴きます。

二〇一二年三月吉日

お祝いの言葉

日立社友クラブ 理事長 金井 務

日立OB美術会展が第五〇回を迎えられ真におめでとうございます。

この美術展は多くのOBがやっておられる種々の活動の中でも特に際立っています。今回の国内の五〇回の美術展のほか、六回の海外展などは特筆に価します。

会社の私の部屋に駒井さんの八ヶ岳高原の水彩画がありますが、これは一九八六年に逝去される五カ月前の最後の作品であります。駒井さんは戦中、戦後の厳しい時代を激しく乗り越えてこられました。そのお人柄に多くの人が引き付けられました。

それをそのまま絵にされたような静ではあるが、一方、力強さを感じる作品であります。高原の一隅で椅子に腰掛けて絵を描いておられた様子が目に浮かび、日立のOB達の原点を見ている気がしています。

日立は茨城の田舎から一匹狼のように発展し、日本を代表する企業にまできましたが、烈しい企業の生存競争の中で働き、多くの困難に立ち向かってこられたOBたちの美術展

がこんなに盛大に活躍するまでになったのは、その激しい会社活動の中にあっても本当に優しい穏やかな心を持っておられたためだと思います。

同じ環境で仕事をしてきた私はそういう先輩や同僚を持ったことを誇りに思っています。

レンブラントを買い損ねた話

日立社友クラブ 元常任理事 篠原 忠彦

日立OB美術会展が五〇回を迎えられて大変おめでとうございます。練達の士が多いのに感服すると同時に、そうでない人も目に見えて上達されるのは見事です。

夫々個性あふれる作品ですが会場には安心してみられる雰囲気が共通している感じがしています。日立の同族意識でしょうか。

それでは私の会社生活のなかで絵に関連したことを御紹介します。

白山閣を作るときのことから平成二年頃の話です。メインとなる絵をどうしようか、と迷っていたところ、ブリヂストン美術館の著名な美術評論家が「今、丁度レンブラントが来ているよ」と言う。レンブラントと言えば一七世紀オランダ絵画の巨匠、光と影の名手だ。早速倉庫で見せてもらうと、奥さんのサスキアをモデルに智恵と戦いの女神を描いた「ミネルバ」という一〇〇号位の傑作だった。社内の関係者に見てもらうと“レンブラントは贋作が多い”と言われたり、会長からは「この絵は建物の値段より高いね」と言われて結局手に入らなかった。

この絵はその後しばらくブリヂストン美術館に寄託され一般公開されていたが、結局、日本には落ち着かず海外に流出して行った。先日、久し振りにレンブラント展が開催された折、この絵が「書斎のミネルバ」と題され、ニューヨークの個人蔵として公開されていたがやはり圧倒的な存在感を示していた。

白山閣はその後、平山郁夫画伯の傑作「那智の瀧」をいただくことが出来、迎賓館の風格を高めていることは喜ばしいことではある。

第五十回記念日立OB美術会展によせて

―二人の師、鷺尾竜平さんと栗原信先生との出会い―

立見 榮男

憧れの新宿・紀伊國屋画廊で、美術評論家の宝木範義先生のご推薦で最初の企画・個展を開催したのが平成一一年一月一日でした。初日に、カメラを手に会場を訪ねて戴いたのが、多賀工場時代以来、激励し続けて戴いた鷺尾竜平さんでした。

その折、日立OB美術会の講師のお話を伺い、「五十六才で早期退職の、不肖な私で宜しいでしょうか」とお尋ねしましたら、「美術の前では、前歴不問です」とのお話で、何時しか春秋の「ギャラリーくぼた」での展覧会の研究会にお邪魔致すことになりました。

回を重ねる毎に、皆さんとの絆も深まり、秀作・佳作や少し変な（面白い）作品と出会える歓びを沢山戴いております。又、きめ細かなご支援を折に触れて戴き、感謝と同時に、日立OB美術会の講師をさせていただきますことを、至福と存じております。

鷺尾さんが総務部長当時の多賀工場はスポーツの盛んな一方、職場文化活動も盛んで、ある日突然、就業時間中に文化講演会が開催され、文化勲章を受章されて間もない当代随一の洋画家・中川一政先生の飄々としたご講演を拝聴させて戴いた驚きは今でも忘れるこ

とは出来ません。今日では考えられない程贅沢な文化レベルの高い職場環境でもありました。文化人のご来場も多く、棟方志功氏が要害クラブの襖に墨絵で鷹の雄姿を描かれたり、辛島さんが築かれた大甕陶苑の窯には我が国の陶芸界の憧れの先鋭であった竹内彰さん、一時期は加守田章二さんも在籍され、洋画家の栗原信、彫刻家の松村外次郎両先生等も度々来場され、幹部とも交流され、工場で働きながら芸術に憧れる二十代の私共の拙い作品にご批評を戴く等、夢のような環境の中から、私自身も栗原信先生に見いだされ鷺尾さんを通して二紀展への出品のお誘いを戴く等、「師との絆」が今も繋がっていることを思いますに、仏道で言う「仏法僧」〓良き「師」、良き「志」、良き「仲間」の大切さを思うこの頃であります。

現会長の山本衛さんのお父さんが、日立で最初に栗原先生との御交友を温められたお話をお伺いし、尊いご縁の重なりに感激致しました。

栗原信先生が創立され優れた公募団体に育てられた二紀会を、当時の工場の若者が半世紀を経て今、支えさせて戴いている不思議なご縁を感慨深く思うこの頃です。

（社団法人二紀会 常任理事・事務局長、日立OB美術会講師）

一枚の絵

天野 雅之

無言館に「家族」と言う絵が有る。何の変哲も無い、昭和初期の少し裕福な両親とその子供達を描いた記念写真的な油絵である。二十代で戦場に散った作者の兄が、絵を見て言った事が記されていた。

「弟がこの様な絵を描いていた事は知らなかった。我が家は貧しい農家で、一度もこの様に盛装し、こんな幸せそうな雰囲気浸ったことは無かった。恐らく弟は、貧しい両親が苦勞をして美術学校に通わせてくれた事に感謝して、自分の夢見る理想の家族像を描いたのでしょう」と。

これを読んだ時、ここに有る絵には、仮に絵画的な価値が乏しくても、生き残った親族や友人達にとって、物語が有るのだ。現代に生きる我々も、何がしかを各々の絵から読み取る事で絵の価値を別な意味で見つける事が出来るかも知れないと感じながら後にした。

外は、蟬の声に包まれ、真夏の太陽が射し、一段と汗が噴き出した。

知らぬ者同士で「暑いですね」と言って、何となく「ホット」した気分になった平和ボケに活が入った一日だった。

(注) 「無言館」

無言館は、平成九年信濃上田市に開館した私設美術館で、第二次世

界大戦中、志半ばで戦場に散った画学生達の残した絵画や作品、イーゼル等の愛用品を収蔵、展示している。

光と影の水彩画を描きたくて

有田 まさみ

二十年ほど前に、サンタフェに旅行したとき、たくさん水彩画を見ました。

その頃のアメリカは、油絵より水彩画のほうがポピュラーだったのかもしれませんが。

その透明感と光と影の対比を活かした美しい絵を見て、わたしも水彩画を描きたくなりまりました。数年後、水彩画を始めました。

以来あまり熱中するでもなく細く長く描き続けています。静物画から始め、風景画に変わりました。風景画を描き始めたころ、なかなかうまくいかず、主人に風景画はやめたらと言われ、よけい風景画に執着して描きました。

野外でのスケッチは常にサークルの仲間と出かけます。絵の情報を交換したり日常のおしやべりをしたり、自然のさわやかな空気のもとでのスケッチはたのしいものです。

絵がきっかけで知り合いもでき、日立OB会にも入れて頂きました。絵も上達したいですが、そのような人とのつながりも大切にしていきたいと思っています

私はこうして絵を始めた

栗根 洋

都心の見慣れた風景には幾つもの思い出があり、これらを次世代に描き残そうと「江戸東京百選」を描き始めたのは二十一世紀に入った頃である。東京は江戸時代以来の歴史的建物・緑豊かな公園・美化の進む河岸に恵まれている。私は早速NHK文化センター青山教室（五十嵐吉彦講師）に入会した。

バス・地下鉄が網の目のように走っている都心はスケッチ場所に最適で、天候を確認してからあつという間に目的地に着き、二時間もあれば一枚の絵が描ける。そして帰りには銀座の画廊に立ち寄り絵画仲間とも会え、幅広い美術の勉強もできる。

世界スケッチを指す五十嵐画法は歴史を描き残す私の画法そのものである。F四サイズは携帯やホーム画廊向きで、ペン彩画法は絵にメリハリを与え、空気遠近法は街並みに奥行き感を与え、透明水彩画は混色、重ね塗り、滲み、ぼかしが微妙な色合いや鮮やかさを与え、紙の白さは光やカゲや輝きや時の流れ等のみずみずしさや爽やかさを与える。

隅田川や浅草を舞台とした広重や北斎の絵の二十一世紀版を「隅田川万華鏡」というホームページ上に同好仲間で描き始めているがなかなか楽しい。

日立OB美術会と私

安藤 雅

OB美術会に入会して、六年目になります。私の後に三十名を越す方々が入会されました。でも入会者は先輩ばかりで、いまだに私は若い方から二、三番目です。

雨の展覧会の日など、「安ちゃん、表通りに行ってタクシー呼んできてよ」等と頼まれます。会社を辞める頃は古参扱いで、それなりの対応でしたが、この会では形無しです。

いつも「若いんだから」と言う枕詞を付けた雑用を頼まれます。

不思議なもので、言われ続けると自分でもその氣になってきます。会員の平均年齢は七十二歳くらいだそうです、名誉会員は八十八歳からです。その会員の絵が毎回毎回、展覧会毎に上達しているのは驚きです。

いつも「きみ、若いんだから」と言われる私が先輩諸兄の年齢になるには、大学生活を何度も何度も繰返せる程の余裕があります。その時間を無駄にしない様に、しっかり上達を目指して氣を引き締めて行く積りです。

絵画と私

石井 博

多少、絵心があつた私ですが、日立OB美術会に入会してから機会ある毎に諸先輩よりご指導を賜り、このおかげで進歩の軌跡が見えたかなと自画自賛しています。これからも健康に留意して日常生活を通じて楽しみながら納得のゆく絵を描きたいと心しているしだいです

三年経過して

石川 良教

満六十一歳で退職以来、三年経過。当初やることが決まらないまま毎日が日曜日の生活を開始。半年ほど様々な人達とお付き合いをし、先輩諸氏の経験話を聴いては自分の引退生活プランを模索。そんな中、某大学の特任講師の話に乗り、学生達の指導をしつつライフプランを考えたところ、自分流「シニアライフの五原則」に行き着いた。

その第四の原則が「二種類の趣味を楽しむ」こと。一つはスポーツで複数人と楽しみながら数値で結果が判るもの、他の一つは先々、老いた後も一人で楽しめ、かつ具体的な目標に向かって向上意欲をかき立てられるというもの。

こうして選んだのが、ゴルフと水彩画。水彩画は予想以上の展開で毎日が充実しており、弱かった右脳が刺激され新たな感動が得られる醍醐味を味わっている。現在四人の仲間達と研鑽し合っており駆け出しながらも各種グループ展に年六回ほど出品。

七月には日立OB美術会に推薦いただき入会。とにかく、これからは何事にも決して頑張り過ぎず、気長にやっていきたいと思う今日この頃の私である

私と絵画

石田 秋男

私は、平成二十一年に日立OB美術会へ入会させていただきました新人会員です。絵画を始めたのは、七年前ですから、ビギナーの部類であります。絵画鑑賞は、昔から大好きでしたので、上野の森へ足を運び日展、白日会展、海外展など長年に亘り鑑賞を続け、楽しみ、憩い、癒しを求め今日に至りました。

会社生活が終ったあるとき、昔から公私に亘り、ご厚情をいただいている地元の先生から「描くことを始めたらどうか」と絵画道具一式を頂戴し、恐る恐る絵筆をとることにしました。三年間位経過した頃、全く進歩しない自分に嫌気がさし、先生に「素質がないので止めたい」とこぼしましたら先生から「そんな簡単なものではない、五十年位続けると自分で納得できる絵が描ける」とのアドバイスでした。

そうか、五十年か、あの世へ行っても描き続けると上手くなるのかなー? 「焦らず、スローペースでよいから」と自分自身に言い聞かせ、一步一步前進、努力する決心をした昨今であります。

諸先輩のご指導方、よろしくお願い申し上げます。

私と絵画

磯部 昭二

小学生の頃はクレヨンで絵を描いていた。時々学校内の展示会で壁にはられた。今でもその絵を記憶している。例えば高崎歩兵十五連隊と高崎公園の境付近の滝の絵である。その他は今記憶が薄い。工業学校で描いた百合の花の絵も記憶にある。しかし今これらの絵はない。桐生工業専門学校、東京工業大学には絵画の授業はなかった。日立製作所に入社してから絵とは無縁であった。しかし、機械のスケッチは得意であり、判りやすいと褒められた。例えば米国G E社の実習報告、核融合実験装置の報告書などに薄々ながら記憶がある。工学院大学教授、日本海事検定協会顧問、I S O主任審査員などを全て退職し、年金生活が始まるとき妻より濡れ落ち葉にならぬよう趣味を強要され、新宿の絵画教室に入った。

公募展のポスターを見て手当たり次第に応募した。結構入選した。病膏肓に入り、武蔵野美術大通信教育に入り、学位として学士（造形）の称号を受けた。日立O B美術会展を始めとし、色々の公募展にF一〇〇号からF四号までの絵を出展し、展示してもらっている。国立新美術館、都美術館、上野の森美術館、朝日生命ギャラリー、大阪市立美術館、池袋サンシャインシティ・ワールドインポートマート、久保田画廊等で展示された。

インターネットに本会栗根会員の紹介でホームページが作られており、結構アクセスをして戴いている。又、日立OB美術会のホームページにも、絵や小文が掲載されている。

色々の美術雑誌社から絵画雑誌・便覧などに絵画や経歴の掲載の要請がある。
ことわり切れず掲載される事がある。

私のように人見知り口下手な者には絵は良い友人だ。

油絵と付き合って二十年

板倉 慶隆

十九年間務めた笠戸工場から横浜のOA開発工場部に転勤し藤沢市に定住することになり、ここで初めて油絵を始めることになりました。

カルチャーセンターで初めて描いた絵がヌードデッサンで当時の強烈な印象は忘れられません。以来一水会や独立展の先生の手ほどきを受けて参りました。

現在は人物、静物、風景を描きながら公募展の「上野の森美術展」や「サロン・デ・ボザール展」にも出展して賞をいただきました。

海外スケッチは三回体験しましたが二回はスケッチ団体に参加し、一回は仲間四名で個人旅行としてフランスに二〇日間滞在しパリの木賃宿に連泊し、そこを起点にパリ近郊、東のアルザス、西のモン・サン・ミッシェル、南のアルル等に旅行しスケッチを楽しみました。このときのスケッチを元にした五十号の油絵が今年の一水会展に入選し良い思い出となりました。

私と水墨画

市川 武弘

私と水墨画の出会いとは五十歳台前半に川合玉堂の孫弟子の関澤先生と出会ったのが始まりであった。

水墨画は「墨に五彩あり」、「黒は究極の色」と言われる芸術の世界。

そして浸潤へにじみと紙の余白とのバランスが水墨画の命である。その奥深さの魅力に惹かれている。

先生の講師で、新宿新大久保で教室を開き、現在ではその場所が高田馬場に移っているが十数年続いている。また埼玉県ふじみ野市でやはり先生に講師をお願いして教室を開き二年以上経過した。両方とも人数は二十名弱で小さいながら私は一応会長を務めている。

また、地元の坂戸市では坂戸美術協会がありその理事も務めて雑用に追われている。

これらは年数回展示会がありかなり忙しい。それがまた楽しくもある。来年度は地元公民館事業の一環として水墨画を担当することになりそうだ。

日立OB美術会のHP（美術サロンー私の絵画論）に、「水墨画の世界ー水墨画の基本と動向」を記載している。一読していただければと思う。

豚もおだてりや・・・

井出 勝彦

昭和二十六年、臼田町（現在佐久市臼田）の中学校で有島生馬を審査委員長とする、第四回長野県展が開催された。当時中学一年生だった私の絵が入選した。

美術担当の教師に「有島先生がお前の絵をほめてたよ」と言われ、有島生馬が何者なのか、その話の真偽も不明のまま、すっかり有頂天になってしまった。

「豚もおだてりや木に登る」が如く、絵を描くことが好きになり夢中になって描きだした。以後、高校でも県展に入選、どんどん絵の世界にのめり込んで行った。

美術大学に行く時、「絵描きは親を干し殺す」と反対されたものの、勤め人になることで何とかクリア。定年後に再開して、以来、木に登りっぱなしである。

元気で長生きして、このすばらしい樹上生活を楽しみたいと思っている。

思い出―私の絵の原風景

伊藤 健

小学校五年生の夏のことです。夏休みの図工の宿題で近所の風景を水彩で描きました。それが、我ながらびっくりするほど上手く描けて家族にも褒められました。

そのまま提出したらきつと兄や姉に手伝ってもらったと先生やみんなに思われる、と心配になってきました。それを聞いた母は、「これは本人が一人で一生懸命描いたものです。云々」のメモを書いて絵の裏に貼り付けてくれました。

秋の全校作品展に張り出された自分の絵の裏を返すとそのメモが付いたままでした。恥ずかしくなって、ひとに見られないように急いではがしました。

六十余年前の晴れがましくもほろ苦い、鮮明な思い出です。

あの時の絵を超える作品（自信作）をその後描いておりません。

絵に描いてみたいモチーフ

岩柳 要子

そもそも最初に石の美しさに出合ったのは、二十代の半ば頃だったと思う。桂離宮の庭の石、京都本法寺の光悦の庭、鎌倉素庵の茶室への道、或いは信州で見た道祖神など、日本古来の石の肌や色の美しさ、重量感に惹かれた。

モノクロで写真を撮り、光と影のコントラストを楽しんでいた。

ここ十年、欧州の国々を旅するようになって、あちこちで見た遺跡、半分崩れ落ちたような城壁など廃墟に惹かれ、いくつか作品にした。

なぜこのような朽ちた風情に自分を表現したくなるのだろうか。ピレネーの山あいの村々では、あたかも古から時間が止まったような光景に触れ、石を積み上げてできた教会や民家に力強い美しさを感じた。それは歳月の流れに堪えてきた石が長い間そこで生きてきた人達のさまざまなものを語り続けているからに違いない。今も石が何を語っているのかを掴みたくて描き続けている。

絵に対する想い

江川 隣之介

嘗て大阪の我が家には石井柏亭の油絵が飾られており、岡山の六高時代には倉敷の大原美術館に足を運び、東京に移ってから上野に出かけ、絵画に対する関心を深めていた。その後、ホルベイン画材の東京支店長の勧めで油絵に手を染めた。四十年余り前のことである。やがて「桐朋チャール会」に参加し、東京美術学校出の熱心な先生の指導で絵具を選び、金属の絵具箱（銀座・月光荘特製）等も愛用した。

小田原の梅、長野の杏、上高地の写生にも出かけた。夏休で先生がパリに滞在中に私の出張が重なり、ルーブル・オランジェリー（モネの睡蓮）等を案内して頂いたこともあった。昭和六十三年以降は毎年二週間のヨーロッパ・スケッチ旅行に出かけ、本年度で二十三回を数えた。

初期には現地で油絵を描き、携帯に便利なキャンバス・ホルダーも考案したが、現在では、水彩画で取材し、帰宅後油彩に仕上げることにしている。

風景を前にして絵筆を運ぶ醍醐味、自宅のアトリエでキャンバスに向かうゆとり、各所の展覧会を楽しむ慶びは何物にも代え難いもので、「絵のある生きざま」を既に半世紀も続けてきた。この後何時までも、持ち続けたいものである。

私と絵画（日立OB展が終わって）

大熊 善治

第四十九回日立OB展も無事に終わって、回を重ねる毎に自分の未熟さに目覚めなら、多くの方から励ましの言葉などをもらって感謝している。

勤めていた頃はOB展のことも知らず、自分の油彩画を出品するなど思いもよらなかったが、定年後、自分が好きで一番やりたいことをしようと決めた以上、なるべく無理をしないで山や自然をアトリエで自分なりの風景を思いのままに一人で描いて楽しんでいた。

日立OB展に出品するようになり、作品として会場の壁に掛けた瞬間から絵の中の自分が居なくなり、私が絵の中に探し求めていたものが何か、その答えがないのに気が付く。

当番の時など先輩諸兄の絵の中に囲まれていると、いろんな声で力作が語りかけている様で気が和み、勉強にもなる。しかし足を止めてじつくりと自分の絵を見てくれたか、との心配もある。自分も楽しんで見て回ったが、批判ばかりして素っ気なく足早に通り過ぎていたのかも知れぬ。

小品も出しているが作品として誰かのお目に留まり一人歩きをしてくれればよいのだが、まだまだ、手元に残っている。

私の絵画は山に例えれば五合目にも届かないが、道が続く限り一人で登ってゆこうと思っ

ている。そして今の作品の未完成度が次の作品を作る動機となり、次回のOB展へのプロセスになっている。

第五十回日立OB展が記念展として素晴らしい企画であり、それに向けて私の絵にもとどめを刺すことを期待している。

色彩と建物

大塚 健嗣

数年前から旅行会社の添乗員同行の旅を、イタリア周遊から切り絵の題材収集を兼ねて始めた。世界遺産を連日次々と見せられたり、昔教科書で見た絵画の本物が、想像以上の迫力で脳裏に焼きついていく。

それはそれで旅行の主目的であり、堪能できるものである。しかし旅が重なると、どれも大差なく感じられてくるのはセンスの欠如からきているのか？

ツアーは、おおむね世界遺産を主に観光地を周遊するために、バス移動時間が多い。

これをお喋りや睡眠に費やすのは勿体無いので、前後左右の車窓に目を向けていると「一枚の絵」が切り取れる。慌ててシャッターを切っても窓ガラスに邪魔されて、傑作は皆無に等しい。

近頃いつの間にか屋根瓦、壁の色に絞ってみるようになった。田舎の街角で小さい風景に溶け込んだ可愛い教会、トイレ休憩のガソリンスタンドの前の小さな民家のピンクの壁、ランチタイムの建てたばかりのレストランの緑や黄色一色の壁、石組みの壁に乱暴に塗られた壁の色等が印象に残った。

同じ赤や黄色一色で葺かれた街の景観は良く見られるが、その色合いや形状が良く見ると

違っていて面白い。

色はその土地土地で産する粘土と、その焼く温度で変わってくる。形状は、降雨量や屋根形状などで変わる。復興したクロアチアのドウヴロヴニクの瓦は色違いが一目で分かるほど異なるが、調和が取れて違和感を感じさせない。それに引き換え先日公開された東京駅のドームの屋根はキチツと再現していながら、違和感が感じられたのはなぜでしょうか？

海外展の思い出

大藤 啓子

二十回記念に何かしてみたいことは？との問い掛けに「パリで展覧会を」との希望が。パリに出掛けた際、フランスで野球チームを作ったことで有名な日立フランスの浦田良一社長に話をしました。

会場の確保や絵の輸送などに苦労しましたが、オペラ座に近い「レクセランス・ドゥ・ミキ」で開催することが出来ました。

当時フランスの首相が「日本人はガリガリと金儲けばかりしている働き蜂」と酷評。「日立さんやってくれるか」と日本人会が応援、新聞やラジオで宣伝して頂きました。

日立オルレアン工場の開所式に私の絵が飾られるという嬉しい出来事がありました。

読売新聞に大きく掲載。翌年もパリ「日航ギャラリー」で第二回展を。その後、スペイン、シンガポール、英国、米国展と現地駐在の方々の御支援を得て開催できました。

ケンブリッジ大学とUCS大学に寄贈。バルセロナとロスアンゼルス総領事館に寄贈と幸運に恵まれた思い出深い海外展でした。

アマチュア万歳

岡野 寛

浮世絵師、歌川国芳は北斎や広重に較べて知名度も評価も低かったそうです。ですが、西洋画の技法を浮世絵の中に取り込むという国芳の斬新な試みが最近、注目を集めています。いわゆる『正統派』だったら出来なかった冒険でしょう。

この話を知って頭をよぎるのがピカソの挑戦です。『青の時代』、『赤の時代』そして『キュービズム』と、確立した画風を何度も自分で打ち破っています。プロとしては稀有の事です。

さて、アマチュアがプロの域に迫るのは容易ではありません。唯一の特権があるとするば、どんな絵を描いても誰からも文句を言われない、画壇からつまはじきにされる事もない自由を謳歌できる事です。自分の中で何がしかの満足を得られて、できれば、一人二人でも共感してくださる人がいたら何も言うことはありませんまい。

ただ、引き取り手の決していない、そして捨てる気にもなれない作品が狭い我家を占拠していくのは困ったものですが。

福原さんの遺言

奥村 昌之

大先輩 福原三郎さんは 私が新卒入社一九五二年（昭和二十七年）以来半世紀にわたってお世話になった方で 会社の上司であつたと同時に 亡くなられるまで公私にわたり面倒を見てくださった。

当時日立工場には、現在の日立OB美術会の先輩の方々が多くおられ、福原さんは活発に活動されていたようだが、新入生の私には、絵の話は不思議となかったように思う。

しかし、お宅には、同僚と良くお邪魔して、酒を飲みながら技術展望、業界展望、国の将来など独特のアクセントと話術で我々をリードしてくださつた。わずかの間であつたが私の人生に社会人として強烈な影響を与える二年間であつたと思う。

当会に入つて（平成十年）絵のご指導を得ることになったが、大から小まで実に丁寧かつ念入りに指導され、更に後で氣のついたメモや切抜きや文献など送つて下さつた。

亡くなられた後、ご家族から一五〇ミリ×三〇〇ミリ位の黄色く古びた厚紙を頂いた。

それは紐で吊るすようになっており、アトリエの目の届くところに吊るされていたように思う。

（一）理屈でものを見るな （二）狙いを絞れ （三）部分にこだわるな （四）大胆に

描け (五) 絵具を惜しむな (六) うまく描こうと思うな (七) 自分を甘やかすな

(八) 基本にもどれ (九) 整ったらこわそう (一〇) 粘りつよく詰める、 以上は

似たような内容のものを私も見たことがあるが、その後、ご自分で書き足された。

(一一) きれいどころで終わるな (一二) 描かないところをつくれ (一三) 色の孤立

を避けよ、同系色で遠近をつくれ (一四) 明度の大胆な変化。

いつも反省され、目標を追及されていた様子が伺える。

私は福原さんの遺言として今後自分自身の目標にしてこだわってゆきたい。

私と絵画

小笹 進

私と絵画の付き合いは割合と永い。四十歳代、那珂工場に単身赴任の折、暇つぶしに窓の外の風景を描いたのが始まり、その後、時を経て定年になってから、NHKの絵画教室で何点か添削を受けた。

その後、町内会の絵画教室、日立OB美術会に加入して年間五く七点の制作をノルマとしてきた。その間、前述のNHKを除いて自己流を通してきている。

私自身としてはそれでよかったと思っている。出来上がったものが一般的ないい絵でなくても、それはそれでよいがなと思うし、もっと良くしようとするやと延々と修正を繰り返すことになる。

絵を描くということ（表現者として）

恩田 博

今、三〇号の絵を描いております。

お能の「隅田川」はかなり以前から気になっている題材であります。これを観たのは中学生の伝統芸術を鑑賞する授業での事と記憶しております。お能なるものは、以後一回も見えておりません。強烈な印象として、我が子を探し求める情念を、霊との対話で不条理を昇華させています。これを、東日本大震災の不条理を、鎮魂を込め絵画として表現できないかと取り組んでおります。お能の「隅田川」をそのまま写して描こうと考えておりませんが、象徴的に取り入れて描こうと奮闘しております。

甚だ困難な作業で、今のところ五里霧中の状態です。絵を描くということは、思いをどれだけ絵画として表現出来るかと考えています。

中学生の絵

景山 好夫

昔の中学では、絵の授業は二年生までありました。松本俊介先輩も十数年前には学んでいた同じ教室で、上野の美術学校出の中井汲泉先生に習いました。

先生は今に残る作品の様に、おらかな方でした。

ある時、張り子の虎の絵を描き、先生から「君の絵はいいね」とほめられて、画用紙裏に朱筆で大きな丸を頂いたことをおぼえております。汲泉先生の授業は楽しい時間で、懐かしい中学時代の思い出です。

しかし、三年生になると絵の授業はなくなり、戦争も激しくなり、四年生の時に中退して兵隊になりました。その後、絵はどこか頭の外です。

仕事を止めてから、少年の夢を思い出し、絵をはじめました。いつまでたっても絵にならない絵を追う内に、いつしか、八十才を越えてしまいました。

この年になっても、夢中になれるものがあるのは、朱筆の丸だと思っております。

私と絵画

粕谷 栄治

もし私に絵画の趣味が無かったらさぞ退屈な日々を送っているでしょう。

何時でも好きな時に自由に描ける環境に感謝し、時間を無駄にしてはいけないと思う。

家には油絵や水彩スケッチを飾っている。子供の頃の絵、紙に描いた初めての油絵、旅行でのスケッチがある。其々に想い出が詰まっているので手放せない。

何回か個展をやった。

自宅では出来ない自分の作品だけを一堂に並べて、あれこれ考えるのも楽しい。

また、他人との会話は気がつかないことを知らされ勉強になる。

絵は好きなように描けば良いのだが、退職後は『絵画』と決めていたので基礎知識から学ぶため、プロの指導を受けた。制作の上で大変参考になった。

日立OB美術会展は会員との親睦を深め刺激を受けることが多い。また友人知人との再会の機会もあり、ワインを片手に楽しいひと時を過ごせるのも魅力的だ。

私と絵画

加勢熊 秀夫（玄城）

小学生の頃、挿絵に出てくる歴史上の人物を模写して楽しんでた。神社の掲額に楠木正成や乃木大将、日本海々戦など、多くの絵を見て感動し、あのような絵が描けたら、どんなに素晴らしいことかと思った。

人物画の眼鼻の凹凸や、風景の雲や影の濃淡を表現するのに鉛筆を削り、その粉を指先でこすって表現すると旨く描けそうなることを知り懸命に描いた。

父は喜んで座敷のあちこちに飾ってくれた。村人の寄合で、人々にお世辞を含めて褒められると、すっかり嬉しくなって何枚も描いていたものである。

やがて十二歳の春、進学のため故郷を離れて以来、十数年絵に親しむことはなかった。七十才を過ぎた頃、自由な時間が持てるようになり、水墨画の先生についてならった。

風景画を描くときは、幼いころの山里の想い出に楽しく幸せを感じた。且つまた、古城を好んで描くがその栄枯盛衰の歴史に想いを馳せ、新平家物語の一節にある盛者必衰の理を、あらはす「奢れる人も久からず・・猛き者も遂には亡びぬ」「偏に風の前の塵におなじ」等、とんだ感慨にふけり、げに絵は楽しい。

私と絵画

金川 敏夫

私は、子供の頃から絵を描くのが好きでした。油絵を描き始めたのは会社に入ってからで、昭和五〇年頃から風景画を中心に描いておりました。

昭和六〇年頃、日立OB美術会メンバーの先輩である有泉さんが私の上司として転任して来られ、いろいろ指導を受け、本格的に油絵を描くようになりました。

会社では、有泉さんを中心に「日立物流美術部」を九名で発足（私が事務局を担当）させ、年一回の美術部展を渋谷の電力館ギャラリーで開催しました。

小規模ながら纏まった展覧会になったと思っております。当時のメンバーは、鷺尾龍平氏、有泉英雄氏、佐藤鐵治氏、小松茂氏、関忠義氏等で、錚々たる面々でした。

美術部のスケッチ旅行等では、有泉さん他メンバーの方に油絵、水彩画を教えて貰いました。

鷺尾さん、有泉さんの関係から日立OB美術会を知ることとなりました、大手町日本ビルの会議室でOB美術会展を開催しておりました頃から、毎回見ておりました。

私も会社を引退してから、平成一五年に鷺尾さんの紹介で、日立OB美術会の会員にして頂きました。

会員になってから、美術サロンや美術会展等で大変勉強になっております。

「我以外、我師なり」の心境です。（残念ながら、鷺尾さんと有泉さんはすでに亡くなられています。）

私も、今回の第五〇回展で会員になってから一〇年目という節目の年となりました。

今後、多くの絵を見る中で、絵の表現方法などチャレンジしていきたいと思っています。

普通の絵を描く

金子 一郎

油彩画を始めて十数年経ちましたが、油彩画ってなんでこんなに自由な世界なのかと感じました。油絵はキャンバス上にいくらでも絵具を重ね塗りして訂正ができますし、途中でゴーストップがかかることもあります。また、絵の制作中に受けた感動を消滅しないうちに、色に載せて一気に描くことも出来ます。その上、油彩具の表現力の豊かさ、色彩の比類ない強さも魅力です。またモチーフの強烈な色彩に出合っても、油彩具の強さですべて思い通りに描けて楽しいものです。

先日、紅葉の裏磐梯へ写生旅行をしました時、その自然の雄大さ、美しさに圧倒され、しばしその風景に見とれてしまいました。この景色からどんな構図を切り取り、主役を決め、脇役をどこに置くか、また絵の中にどのような感動表現をするかを考えたりします。

教室の先生はいつも、生徒達に「普通の絵を描くように・・・」といわれます。

絵は自由で勝手、一般的に「いいな、欲しいな」といわれる絵は、普通に描いた絵が一番好まれるそうです。普通の絵って何だろう？ うーん、自然界のルールに従ったもの、見たままの情景を、遠いものは遠く、近いものは近く描く。しかし、キャンバス上に絵を描くとなると、この表現がなかなか難しいものです。色による遠近感の出し方や、色と色の

コントラストの強弱など、しっかり自然界をみて自然から謙虚に学ぶ姿勢が大切です。遠近の色に対しても、絵具の使い方をよく見て、考え、実物を観察しながら、描く事が必要ではないでしょうか。

日頃、これらを習慣化し、そのノウハウを蓄積して、自然の法則に従って、素直な心で絵を描く事が、大事ではないかと思いました。

これからも絵描きを人生の道ずれにして、充実した幸せな日々を送りたいものです。

描く楽しみ

上村 昌司

今回の東日本大地震は我が家にも大きな爪跡を残しました。

幸い家は何とか持ち堪えました。が、壁と柱にはひびが入り、部屋の中は食器や本など家財道具が散乱、私の部屋は引き戸が閉ざされたままという状況で、復旧には約2ヶ月かかりました。

絵の方は所属の油絵教室が建物損壊、一時活動を休止しましたが、六月には仮部屋を探して、仲間と励まし合いながら再開し、現在に至っております。

今年は題材を風景画から蒸気機関車にチャレンジしています。私はポツポツの子で、毎日SLを見、石炭臭い宿舎での生活でした。その頃を思い出しつつ描いております。

SLを題材にした作品を見かけますが、錆付いた遺物として捉えた絵が多いように思います。昭和時代を支えたSLが復活し、重量感のある現役の雄姿を描こうと奮闘しつつも楽しい時を過ごしております。

なかなかうまく描けません。が、時を忘れて熱中出来る趣味があることを幸せに思っております。

青春時代への回帰

川島 肇

日立OB美術会への入会は二〇〇二年の七月であった。

六月のある懇親会の席で佐藤喜久治さん（故人）に、「今二〇号の油絵を描いている」と話したら、翌朝「佐藤さんから紹介があつたのでOB美術会入会へのお誘いの電話をしました」と当時事務局長の山本さん（現会長）からお誘いを受けた。

何れ発表の機会と場が欲しいと思つていたので、即刻入会する事を決断し、第三十一回展に二〇号の油絵を展示していただいた。

展覧会中に疎遠だった高校時代の友人から電話があり、会場で会うことにしたら数人がきてくれた。それから回は回を重ねるごとに参加人員が増え、今や二〇人前後の同期の集まりの会（芸術を楽しむ会）になっている。

毎回、遠慮ない批評と激励を受け創作意欲を大いに掻き立ててられ、原動力になっている。展覧会後は決まって昼食会、付近地の散策や国立印刷局等の見学と、楽しいイベントが組まれていて、青春時代に戻つての会話が弾む。

絵のお陰で年々、若さを取り戻している。

一〇〇〇号を目標として

川辺 潮

一九九〇年の（中研）―（デセ）研究連絡会議の帰りに、「子供の頃少々やった」と喜田祐三画伯と交わした後日、油絵の道具一式が自宅に届いた。これが縁で、油絵を本格的に描くようになった。喜田画伯と故佐藤喜久治画伯のお世話で、古びた革靴やワイン瓶等を囲んで、休日に八号油絵をよく描いた。

故・神原豊三画伯の「古都の鹿累々」に感銘を受け、（中研）遊画展や日立OB美術会展に毒性の少ない絵具で彩る二〇号作品を出すようになった。

その後、大学に転職する挨拶で神原画伯を訪ねた際、「一〇〇〇号（作品の合計号数）を目指して描き続けなさい」と励まされた。

海外展には生憎、所用で作品だけ米国に渡ったが、山本衛画伯に大変お世話になった。

学会発表の毎に欧米の美術館巡りをして名画を直接観る機会に恵まれ、大変勉強になった。二〇年経って、やっと累積で目標の半分を超えたに過ぎない。

後残り少ない時間をフルに自然界と先人から学んで、一〇〇〇号を目指して日立OB美術会展に出し続けたいと思う。

私の絵画暦

川村 善明

私が絵を描くことに関心を持つようになったのは七歳の頃でした。

飛行機が飛んでいる絵を「上手く描けたね」と父に褒めてもらったのがきっかけだったと記憶しています。

小学三年生の頃、洋画家の先生に油絵を習いましたが、間もなく戦争が激しくなり、絵の勉強を中断し、中学、高校、大学時代は殆ど絵を描きませんでした。

油絵を再開したのは、日立に入社し工場の美術クラブに加入してからです。

しかし、その後、仕事が忙しくなり制作活動をピタリと中止してしまいました。再び油絵を再開したのは六十五歳の頃です。

建協さんの紹介で日立OB美術会に入会し、立見先生のご指導や会員の皆さんの作品に刺激を受け、作品制作に励んでおります。

七十歳の頃、油絵の基礎をもう少し勉強したいと考えて、武蔵野美術大学の油絵通信教育コースで学びました。この時の勉強は私の絵の上達に役立っていると思います。

私と絵画

木崎 隆市

風景を画くのが趣味の一つ、しかもその絵をハガキ大に印刷して多くの人に見て貰うのが楽しい。風景を写真に撮れば正確なことは之に敵うものはない。

しかし構図にしても彩りにしても気に入らぬ事が多い。従って自分の好きなものを追加したり、邪魔なものを削ったりする。

技術面など批判も多い事であろうが、何を訴えているかが判る作品であることが大切である。

画を鑑賞するのに作者名やその価格など伏せて見ることが肝心であると云う。

いたずらに大型化したり、奇妙な表現をしたりで驚かすような絵は避けたいと思います。

シンガポール展のお手伝い

喜田 祐三

半導体産業が急速に拡大するアジア（シンガポール）に私が赴任したのは、一九九五年春のことでした。赴任後、私が最初にやった仕事は本業の半導体ではなく、日立OB美術会「シンガポール展」のお手伝いでした。一九九五年五月二〇日「シンガポール展」はパン・パシフィック・ホテル三階のコリドーギャラリーで、華やかに開催されました。私は会場の設営、陳列補助、歓迎パーティーの準備など、夢中になって下働きで頑張りました。当時、会長は福原三郎氏（故人）、事務局長は山本衛氏（現会長）でした。南国の古い街並み、白い壁と赤い屋根のコントラスト、紫のブーゲンビリアが咲き乱れる裏通り、ジョホール・バルの寺院などスケッチにもご案内しました。福原さんは「喜田君、いいところだねえ…」と言って、車の行き交う道路の真ん中に座りこんで街並みをスケッチされたのには、私は命の縮まる思いをしました。今、思い起こせば歓迎パーティーのこととか、二次会で聴いた大藤さんの美しいソプラノとか、ジョホール・バルの金のブレスレットの事などを鮮明に思い出しますが、肝心の作品のことは不思議に記憶に残っていません。私は二〇〇二年秋に七年半に及ぶシンガポール勤務を終えて帰国して定年退職しました。今、日立OB美術会のメンバーに入れていただき、楽しく活動しています。

二人の師匠

城戸 宏

私が八年前、油絵を始めたきっかけは一駅離れた所の長尾画伯との出会いであった。最初の指導はレンブランドの模写だった。アクリルで描き、乾してはその上に（おつゆがけ）を四層位すると、微妙な色あいが出る。しかし三年後、残念ながら長尾画伯はガンで他界された。

藤沢のアサヒカルチャーで何となく出会ったのが、立期会の山本治画伯である。

先生の「ヌードこそ上達の早道である」を信じて、毎週、ヌード作品に励んでいる。

「一番美しく感じた所を中心に描け。モチーフは、バックの形から見よ。バックもモチーフと同じくらい丁寧に描け」、等々。

最近夢中に破壊と書き直しを繰り返していると、「其処で止めよ」と云われる事がある。

自分では気が付かなかったが、ハットする様な色合い、形が描けていた。

師匠の期待に応え、絵の雰囲気、色彩で勝負したいと思うこの頃である。

スケッチ旅行での・・・

桐生 靖子

湾岸戦争開戦前日の帰国となった初のスペイン旅行を皮切りに、数々のハプニングに見舞われた。中でも記憶に残る二つのハプニング。

一つは、グループスケッチ旅行中に立ち寄った、山梨美術館で渡された娘からの「大至急連絡を下さい」の伝言。連絡をとると、父の訃報でした。美術館から急ぎグループを離れ電車で帰路につきました。

もう一つは、憧れの南仏スケッチ旅行。あと三日で帰国となったアルビでの夕食のとき、同行の皆さんが、私の五？歳の誕生日をバースデーソングと大好きな紅いバラの花束で、お祝いをしてくださいました。感激もひとしお・・・。ホテルに戻ってみたら日本から、Happy BirthdayのFAXが、もちろんお土産リクエスト付きでしたが（笑う）。

今までのスケッチ旅行にはなかった素敵なハプニング。普段の旅行では何も起こらないのに、「スケッチ旅行」に行くと必ずと言って良い程、起こるハプニング。

「時代と共にその連絡手段は変わり便利になり」今は何かあると携帯に直接連絡ができる様になり、こんなハプニングは滅多になくなりました。

それもこれも人生の大事な一ページです。

私の記憶に残るスケッチ旅行と共に、頭の中に焼きついた様々な一瞬の風景は、ずっと変わらないと思うこの頃です。

絵画におけるある犯罪

黒岩 裕介

淡い夢を見て今年も日展に出してみた。結果はまだだが満足いく作品にならなかった。元来、絵は現場で現物と対して描くことを「よし」としてきたが、絵を描いていた父の遺した取材写真に、地名不明の感動の一枚があり、これを元に描いた六〇号は埼玉県展に入選した。

さらに同じモチーフで「古い街」と題して一〇〇号の日展作品の制作にかかった。実家に法事で帰るたびに、何度も父のアルバムや資料を調べたが、全く地名の手がかりがなかった。

モチーフの雰囲気と家の形から当初イスラエル、次にスペインのトレドの外れだと自分に言い聞かせ、これで研究会も押し通したが、はつきりしない不安がだんだんと募り筆が鈍り始めた。何日もかけてインターネットで調べ、これが南イタリアの「マテーラ」と判明した時は既に遅く、絵は赤い屋根のスペイン風に仕上がっていた。現場を見ずして地名も分からずに描いたことは犯罪にも思え、その罪悪感との苦しい戦いを苦々しく反省した。次回は頑張ろう。

モンブラン

桑原 裕

私が、欧州の最高峰モンブランを初めて描いたのは、二〇〇九年八月です。

この年、私は、その前年に続いて、モンブラン周辺をハイキングしました。実際には、二〇〇九年に油絵F三〇号に描いた二枚の景色は、モンブランそのものでなく、ドリユの絶壁を背景に、ハイキングする自分を描きました。

今年は「モンブラン直下」を描きました。油彩F二〇号です。

今回は本格的な登山をしました。海拔四四〇〇メートルくらいのところでした。また、昨年、シャモニに着いた翌日にハイキングしたルートに「モッテ小屋」という小屋があり、あたり一面お花畑でした。この「モッテ小屋」も今年描きました。これも油彩F二〇号です。実際には、この「モッテ小屋」はドリユの大岸壁の最高の見晴らし台ですが、私の絵は、小屋とお花で埋まってしまいました。

来年は、モンテローザにも登るので、これも描きたいと思っています。そしてモンブランの頂上から見た景色も描くつもりです。F五〇号に描きたいと思っています。

大震災と私の絵

源馬 和寿

先の東日本大震災後、親類も多くまた若き日に学んだ地、東北の惨状に居ても立ってもいられず、長靴、ゴム手袋、食料など一切をリュックに詰め込んで、一ヶ月も経たない被災地に単独ガレキ撤去のボランティアに出かけた。この時の人脈や出来事が、奇しくも私の絵に少なからぬ影響をしている。

このボランティア活動が縁で、石巻の知人から、震災後の八月に被災地石巻で開催された「青少年のための科学の祭典」のポスター図を依頼され、むろん無償で引き受けた。「辛い震災を乗り越える希望と明るさ」「若者の未来への飛躍」など未来志向の図柄が主催者からのご要望だった。

これまで二〇年も具象絵画一本に漬かってきた私に、何万枚も印刷されるポスター図の制作は冒険でもあったが、貢献したい気持ちの方が勝った。

ここ数年の抽象画への興味が助けにもなり苦戦三ヶ月間の末、完成したポスターは好評だったと聞き安堵した。更にその後、このポスターがキッカケで、被災学生支援の団体から別のポスター図を頼まれた。微力ではあるが、被災地復興にも貢献できる絵という不思議な力を実感している。

私と絵画

小暮 房男

月に二度、同年輩の仲間と絵画の勉強をしています。その時間帯が午前十時から正午迄です。毎回終了と同時に近くの「そば屋」に行き、昼食会ならぬ飲み会をしています。話題は絵画以外にも多様な話題が次から次に飛び出してきて、大いに語り、飲み笑い、そしていつも大きな刺激をもらい、次回までの画く力をいただいて帰ってきます。

絵の出来次第で気分の良い悪いがあっても画く事の出来る喜びは、何にも例え様がなく、画いて居る時の気分はいつも壮快です。

絵はその時その時の画く人の本当の姿を表現するものではないかと思えます。

私の生きた証？として残せるものは、絵画以外に無いようです。遺産？でしょうか。

そば屋の壁に仲間の絵と一緒に私の絵も飾られています。誰かが小声で、「絵もうまいが、そばもうまいネ」といいました。

私と絵との出会い

小島 浩

私と趣味としての絵との出会いは四十年程前に遡ります。

入社して横浜工場に配属の翌年2月に、実習を兼ねて岐阜県的美濃加茂にある工場に転勤することになりました。柳行李に詰めた荷物の中に美大在学の友人の勧めに従い、余暇対策の油絵具と油絵入門書一冊を忍ばせて岐阜に向かいました。

日曜日などで時間のある時は春浅い美濃の空の下、寮の屋上、木曽川の川べりで絵筆を握る優雅な時間を過ごしていましたが、夏の終わり頃に再び横浜に戻るといつしか絵から遠ざかる日々となり絵具は物置の片隅に放置されました。

二〇〇八年末の退職後、物置の中で埃を被った画材を見つけ出し、絵に対する思いが頭をもたげてきました。その頃、水彩画の展示会などを観て回る機会も多かったこともあり、近くの大学で行われていた木川秀雄先生による透明水彩画教室に躊躇なく通い始めましたが、その講座も半年後には閉講となってしまうました。

しばらくの間は再び絵から離れていましたが、知人の誘いで大田区の水彩画グループに参加し、現在に至っております。

水彩画歴は二年程になりますが、昨年十一月に山本会長のご紹介で日立OB美術会に入会

させて貰いました。「透明水彩でなければ描けない美の世界」を目指して、今後とも楽しく精進していきたく諸先輩方の作品、アドバイスを参考にしながら頑張ろうと思います

私と絵画

小林 万大

昭和三十年代ですが、私は油絵を始めたばかりで、寂れた高萩の炭坑や、本山の山村などをスケッチして歩いていたが、基本的な勉強をしたいと思つて求めたのが、「アトリエ」という絵画の入門書であつた。

この書物の冒頭に山下大五郎画伯が書かれたメッセージがある。それは「風景の向こう側にあるもの」について書かれたものです。

「風景の向こう側にあるもの、それは自分自身であること、風景の中に自分がいる、その自分を引張り出してくること、そのことが一番大切だ。省略することも誇張することも、あれこれ組み立てることも、皆、この上に立たなければ、何も役にもたたないと思うのです」と画伯は申されている。

振り返ると、この言葉に出合つて、はや五十年。

自問自答して、艱難辛苦して描いてきた。絵を描くこと、それは自分の心を描くこと。五十年を機に心を新たにしております。

ご縁があつて

小松 茂

日立OB美術会との関わりはシンガポールでの海外展の時まで遡ります。

当時、私は日立物流の現地駐在員をしておりましたので、日本からの貨物（絵画）受け取りから、パンパシフィックホテルでの展示会終了後、日本へ返送するまでのお手伝いを仰せつかりました。日立OB美術会のメンバーの殆どが、嘗て日立物流がお世話になった方々であり、粗相のないよう取り扱うよう日本サイドから要請があり、HAS（日立アジア）の総務からも鄭重な御願いがありました。以上の事情から、可成りの緊張感を持ち作業を遂行し何とか無事に打ち上げパーティーまで漕ぎつけホットしたことでした。

数年後、帰国しましたら、上司であった故・有泉さんや、シンガポール時代一緒だった喜田さんのお勧めがあり、会員にして戴くことになりました。ホテルのコンコースでロ―カルスタッフと展示作業をしていた時には、まさか数年後、私自身が会員になろうとは夢にも思いませんでした。不思議なご縁を感じました。

入会後の私は余り熱心な会員ではなく心苦しく思っておりますが、年二回の美術展のお陰で、創作活動をほそぼそ乍らも続けてこられたし、立見先生の誠に適切なご指導を抛りどころとして今後も精進して行きたいと思っております。

何で貼り絵なの？

近 敏雄

私が受ける質問で一番多いのがコレ！。この一文がその回答になりますかどうか・・・。
先ず貼り絵は絵具のように色を混ぜることが出来ない。せいぜい絵具か染料で加色するか
または異なる色の和紙を張り合わせて、透けて出る色を活用する位なのだ。

貼り絵を貼るということは絵具に例えれば、チューブから直接キャンバスに色を塗るのと
同じなんです。

数年前迄、絵具で絵を描いていた頃、求める色を追求するあまり絵具を混ぜ合わせすぎ、
どんどんと彩度を落としてしまう苦い経験を繰り返し、これだけはイカンとチャレンジし
たのが貼り絵なんです。

今ではその成果なのか貼り絵の下図を絵具で描く時、チマチマと混ぜることなく絵具本来
の色を大切にするようになったんです。

更に、和紙は日本の伝統色を継承する数少ない分野の一つだし、私も日本人の一人として
「この伝統を守っていききたいな」なんぞと大きな事を考えています。けれども一方では現
代的な方法で作られている和紙が多いのも事実です。

丁寧につくられた手漉きの和紙に出逢うと正直ホッとします。和紙を仕込みに行く時、本

来なら絵に合わせて紙を選ぶのが普通ですが、このような本物に出逢うと、アッこの紙ならこんな絵が描けると、逆の発想をすることもしばしば・・・。

ともあれ和紙のお店は私にとって正に天国。和紙を選んでいるときは、うれしくてうれしくて、宝の山にいる気分と言う訳で、当分貼り絵は止められません。

だから、止められない

酒井 康彦

物は全て、固有の質感と重さを備えている。それ故に、固有の色彩が与えられている。その色彩は、光と影により無限の形を形成しているが、それを認識出来るのは、記憶によるものであり、「見なれた」とか「見たことがない」とかの表現となる。

絵画とは人間が記憶しているこの認識を表現したものとも言えるのではないか。記憶とは自分にとっての今という時の表現だ。最近、年を重ねることと絵画の本質とは、どこかで似ている感じがしてきた。風景画が広がる記憶とすれば、静物画は凝縮する記憶と言えるだろう。若いときは経験した記憶を取り込もうとして激しい画となり、年を経る毎に、記憶を引き出そうとして、奥行きのある深い画になる。絵とは不思議なものだ。上手に描こうと新しいものに挑んでみても、結局は記憶の手のひらの上でもて遊ばれているのかもしれない。だからこそ、他人の絵を見ることは、自分の記憶の確認と記憶の増幅作業をしているのだと捉えることが出来る。好みの絵を見ると、その作者に好意を持つことが出来るのは、まさにその事だろう。そんな事を考えながら絵筆をとっている。記憶が完結していないことをもどかしく、そのくせその事に少しホッとしながら。これだから、絵は、止められない。

油絵の隠し味

佐藤 興吾

秋田・岩手にまたがる八幡平山麓には山ぶどうの巨木が自生し、秋には妖艶な紅葉がみられる。黒ダモの木に巻きついた巨木では、バイオレットからデ IPP レッドまで、一本の木ですべての色を発色し、見飽きることはない。

持参した絵具をパレットの上に並べてみても、大自然の醸し出す優艶さには遠く及ばない。F 四〇号に仕上げたものを、他の作品と共に公設の立派な美術館に展示していただいた。たまたま、避暑と制作をかねて帰郷していた秋田県出身の洋画家（ニューヨーク在住）K 氏の目に止まり、「大変よい絵だ」、「このような絵を、目を見開いて何枚も描いてみなさい」と励ましていただいた。この山ぶどうの絵は、素人の作品で拙いが「隠し味」が巧みだと解説してくださった。

前記の山ぶどうの紅葉に、少量のエメラルドグリーンを配したことで、絵が引き締まった。油彩は、発色が生命だし、「隠し味」を楽しむ余裕があつてよいと。

第二の青春

佐藤 鐵治

小学校のクラス会で、還暦に当たつてのエッセイを綴つた記念誌の中で次のように嘯いた。「暦が生まれた干支に還つたのだから、もう一旗揚げようと思う：私は今、ある美術研究所の学生である」：と。爾来二十二年、絵画関係の三校に学び、わけても講談社フェーマス・スクールでは卒業生代表として、「文部省生涯学習局長賞」を拝受。更に、長谷川晶先生（故人）をはじめ示現会の成田禎介先生の直接ご指導も頂き精進の結果、今春、示現会準会員に推挙頂いた次第である。

つい最近、この度の東日本大震災に当り、「忘れない　：三・一一」展が、宮城県立美術館で開催されることとなり、実行委員会からの強い出品要請を頂き、お受けすることとした。安岡正篤先生の「人生信條第六条」にある「祖国と同朋のために相共に感激をもつて微力を尽くそう」：との趣旨に沿つた快挙である。

絵画を描き始めた頃

澤野 進

子供の頃から絵が好きでよく描いていた。

戦後、新制高校の二年に編入となつてクラブ活動が盛んになり、絵の好きな友人数名で美術部を立ち上げた。部費が出たので、仲の良い友人と二人で大胆にも“街の人物デッサン研究会”に参加することにした。

横浜の伊勢佐木町近くに住んでいて、このような催し物に関心を持ったからである。

大人の絵描きに混じつて、ドキドキしながら見よう見まねで初めてヌードのデッサンとクロッキーを描いた。参加者は十数名であったが、指導する先生はいなかったように思う。高校の美術の先生は若い絵描きで、僕らの活動を知り、今、踊り子を描いているがよかったら一緒に描いてみないかと誘われアトリエを訪ねた。

タイツ姿のモデルは踊り子というより体操選手のように活発で、先生と色々話をしながらポーズを決めていたのを覚えている。

気に入ったデッサンも何枚かあったが、永い間に紛失してしまい残念である。

絵画の楽しみ

鹿戸 利一

齢、八十路もほぼ半ばの今も、旧知の仲間がおり「絵をみる・描く」ことは、私の癒しの時間でもあります。

戦後、亀戸工場勤務のころ、サークルで二紀会創設者の一人、栗原先生にデッサン（会議室に施錠して、ヌード、着衣、静物など）と油絵の基本を学んで絵の面白さを知ったことなどを思い出します。

働き通してリタイアの後、再び描きはじめて強く印象に残った風景写生は北アルプス信州の白馬岳でした。青木湖を描いた翌日、朝日に映える紅葉と雄大な白馬の銀嶺を間近に仰ぎ、その美しさにこころ洗われ、深く感動して、夢中で絵筆を走らせました。

創作ではキャンバス面で、在るものを省き、位置や大きさを少し変えたり、明暗を付け、また構図・形・色調に自分なりの感性で筆を進めるのは愉しいものです。

ここで戯れ句を一つ：「年取りハゲや白髪でも、背筋伸ばしてまだ若い、絵筆握って美を求め、夢を追う人、ボケ知らず」

日立OB美術会の思い出

重永 泰彦

私が、OB美術会に入会したのは、森岡道一さん（日立元専務）の推薦のお蔭です。日立総合経営研究所に在任中「一緒に油絵を学ばないか」と提案されたからです。

我孫子には有名な画家が多く住んでおられ、教えて頂くことになりました。従業員に希望者を募り、女性も含めて七、八人で絵の勉強を始めました。油絵のABCを親切に教えてもらいながら、花や静物を一生懸命書いたものです。

ある日、森岡さんから「君も日立OB美術会に出品しないか」と言われ、己の下手を自覚、辞退したら、「おれも下手だ。発表することで上手くなれるものだよ」と言われ、しぶしぶ出展したのが最初でした。

森岡さんは、今や亡くなられ、私はなかなか上達しないが、人生の良き先輩に感謝しつつ、今も一生懸命チャレンジしています。

油絵は趣味として最高であり、動機を与えていただき、今後も続けたいと願っています。一人で好きな時に始められ、他人の作品も勉強になり、良い趣味を持つことが出来ました。

三つの歓び

庄司 逸雄

私は、絵を描くにつけ、特に日立OB美術会展に出品するにつけ、三つの歓びを味わう。その一は、日常生活において町を歩いているときや、ちよつと遠出をして車窓から外の景色を眺めているときに、「こんな情景を絵にしたら楽しいな！」と、一見つまらないような景色に心をうたれ、「絵を描いてみたい！」との思いが湧いたときである。

その二は、脳裏にストックされている「描いてみたい！」の一つを引き出しから取り出し、「制作」に取り掛かり、形がうまくいかないとか、空の色がうまく描けないとか言ってみながら、それでも徐々に絵が出来上がるうとしているときである。

その三は、自分なりにこれで満足と思つた絵画を額に納めて、日立OB展の会場の壁に飾られたときである。とくに、壁に掛けられたわが作品を見るにつけ、可愛いわが子の嫁入り姿を見るに似た思いが込み上げてくる。

今後、この「三つの歓び」を大事にして行きたい。

私の絵画への思い

所澤 和廣

日立グループで勤めを終え、悠々自適の生活を思い描いていた頃、ある絵の公募展出品を思いつき、二枚の油絵を夢中で仕上げ、出品したのが絵画を続けるきっかけになった。そしてその頃、職場の後輩が活躍していた日立本社絵画部（現日立絵画同好会）に入会した。また、この集りの指導者の竹市先生の教室にも参加し、先生主宰の絵画展にも出品した。後にこの絵画会（東京湘南絵画会）に入会し、毎年の公募展に出品を続けている。また、これと同時期に日立OB美術会への入会のお誘いを先輩から受け、入会させて頂いた。この展覧会は日本ビルで開催されていたので現役の時代から時折見させて頂き、多くの知己や先輩のご活躍に感服し、負けじと頑張っている。

私は小学生の頃から絵心があり、小・中学生時代は田舎（信州）の風景をよく描き展覧会等で先生から褒められた。高校時代は絵画部で油絵を描いた記憶があるが、進学活動でこの時代以降、次第に絵から遠ざかってしまった。

日立入社後は日立工場配属で、絵画クラブに入部したものの、業務、結婚、育児等に多忙で絵を描く時間が取れなかった。しかし、セカンドライフは自然豊かな場所で、本格的に絵の勉強をする生活設計を立て、秩父に住居を移した。現在も武甲山の麓に住んでいるが、

事情により現在も都内での業務を続けています。

絵画を迫及することは大変奥深く、まだ入り口にさえ辿り着いていない気がしますが、それだけにやりがいのあることだと思っています。

なんとか早く入り口を見つけ少しでも自分の世界が見出せるように今後も精進しようと思っています。

福原さんの言葉

杉本 登

私が日立OB美術会に入会したのは、今から二十数年前で、会の最長老として福原三郎さんがおられました。福原さんは、学生時代、現役時代、OB時代を通じて絵を描かれ、月に一度の合評会には必ず出席されました。痛烈な批評とともに、親しく会員皆さんの絵を指導しておられました。

当時、合評会で一緒に勉強した方々は、岩田さん、江川さん、宮野さん、森岡さん、山下さん、鷺尾さん等でした。

福原さんはよく、「絵は上手に描くのではなく、よい絵を描け」と言っておられました。なかなかよい絵というものは描けません。「プロの絵描きさんは、お前がよいと思ってもだめだ。皆がよいと思う絵がよいのだ」と言われて一蹴されます。自分が描きたいと思うものを、トコトン描くのが、一番よい絵が出来るのではないかと思っています。

私と油絵

鈴木 一雄

油絵を始めて七年目になる。退職後、横浜朝日カルチャセンターの「基礎からの油絵―梅野講師」の門を叩いた。毎月曜日の朝十時から十二時半までのクラスで、指定されたモチーフに従って学んでいる。

初めの頃は、ただただ対象物をどう描くかということのみに四苦八苦したが、この頃は、例えば「道」「子供」といったモチーフならば、「道」や「子供」が見て下さる人の心とつながるような絵にしたいと思う心のゆとりのようなものが出てきた。

絵そのものはまだつたないが、四年程前から日立OB美術会に山本会長のご紹介で参加させていただいた。会員の皆さんのレベルが高いので、参考にさせて頂きながら、近い将来「私の趣味は油絵です」と言えるくらいになりたいと願っている。

日立OB美術会と私

鈴木 重男

日立OB美術会に入会して十余年になる。特別に技量があつた訳ではない。ただ、絵を描くのが好きで、所謂下手の横好きで入会した。

当会は絵画を通じ、OB会員相互の親睦を図る同好の「会」である。従つて、小生の如く絵は自己流でも、気兼ねなく、気儘自由に描ける。

更に、発表展では、会員諸氏の百人百色の作品に接する機会に恵まれ、絵心が大いに刺激される。創作意欲を強く掻き立てられたこと、度々である。絶好の自己研鑽の場である。入会以来、風景を題材に、自然の詩情感を絵に表現しようと、試行錯誤、悩みを描き続けた。

画質の向上、進歩は遅遅とし、作品の多くは自画自賛の域を越えられず、自信作は未だに少ない。最近「独楽の趣味とし、描きつづけるに意義あり」と割り切っている。

友人たちに「次作もみたいね…」などと冷やかされながら、絵筆を執っている昨今である。

私と絵画

鈴木 友丸

水彩画を描いて気がつけば十五年を経過。その間、楽しい思い出の一つは親友と一緒に旅した海外旅行だ。並んで描き談笑し、場所探しから素人の絵作りまで、プロ級気どりの外的れの批評で大笑した。

今でも行く先々に展開する絵になる背景と記憶が蘇って、再度行ってみたいなあと、友と語り合う。

その印象に残った旅先は下記。

* フランス（カマレー港・レスコニール）

* ポルトガル（ポウサーダ・ポルトの港・ミーニョ川）

お陰様で、何点か描いて出展し、多くの賞も頂いた。

しかし最近は、もっぱら我が家の周辺に題材を見据えて、ボチボチと焦らず急がず、まだまだ湧き出ずる意欲と発想？を頼りに、深みのある絵を描こうと意気込む今日この頃です。

墨との出会い

曾我 美智子

父は紙と硯、筆を幼い姉弟に与え命令した。題材は自由。ある時は家族団らんの食事。優しく父が見守る中、自由に画いた。父は必ずほめた。

そんな或る日、長女の家に客人をお迎えする前に着物姿で三つ指ついた女性を画け、という。それらの作品はすべてそれぞれの部屋に末永く貼られていた。

仲良し組の友人の父が水墨画の先生。水墨画に興味のあつた私は許可を得、魅力にとりつかれた。

毎日、何時間も座り込んだ。筆は紙の上を舞い踊った。

半世紀以上が過ぎ、子らの手が離れたころ、長年憧れていた水墨画の先生に会った。

父の影響であろうか。しかしである、素質がないのか上達ままならず。

けれども、離れがたく、今は楽しさを自身に聞かせている。

遠い昔のなつかしい墨との出会いを思い起こさせている。

この機会を頂きましたことに深く感謝の気持ちでいっぱいである。

動機

高倍脩

元来、絵は好きであつた。定年後、絵を始めた動機が不純である。絵を描いていると健康で長生きできると聴き信じたからである。

ある日ゴルフ好きの友人が私の絵を観て「こりやトリプルボギーだな」と言った。所詮ゴルフと比べるのは無理だ。ゴルフではアマチュアでもバーディーやホールインワンは取れるが絵では無い。

人から趣味はと聞かれると、お世辞に「いい趣味ですね」と言ってくれるので、これは嬉しい。カミさんは恥の上塗りになるから止めろと言うが、高校生の孫は良いと言ってくれる。これまでに、蘭、伊、仏国等の現地に出向き、有名絵画を鑑賞しているので、目は肥えたと自認している。しかし腕は伸びない。

絵をくれと言う友人も数人いるが、恐ろしいことに絵は心の鏡だと言われている。そこで双方納得のいく作品を描かねばと考えている。

又、当初の目的達成のために描き続けたい。

日立OB美術会に寄せて

高見 宏治

私は六十歳から油絵を始めましたが、師事した先生は「力をつけるには大きい絵を描け」との指導のもと、二〇号、三〇号に夢中になり描いているうちに、作品の発表の場が欲しくなり、日立OB美術会に入会させて頂きました。

この美術展に出品するのがこの上ない楽しみです。運営幹事の皆様には大変感謝しています。

最近では趣味が昂じて公募展の一陽会にも出品するようになり、一三〇号、一五〇号と取り組んでいます。油絵の難しさにも直面し、一方では一陽展の大作を見るたびに、その素晴らしさと奥の深さも感じており、自分の力のなさを痛感する昨今です。

このようなプロセスの中で、日立OB美術展は逆に二〇号前後の絵の勉強の場として格好な最適な場所ではないかと思っています。

会のますますの発展を祈るとともに、私自身も初心に立ち帰り、納得のいく小品の発表の場としてこの会に参加してゆきたいと念じています。

私と絵画

竹尾 和代

二年前、六十歳半ばで亡くなられた山崎俊明先生に、私は三十年間絵画の指導をしていただきました。それ以前にデッサンに熱中した時期があり、絵に親しんで四十年になります。

先生は「竹尾さん、描けるから描くな」と十年以上言い続けられました。描写から脱皮して自分の絵を創る事は難しいが、そこが境目なのだと。

モチーフを大切にして表現することに迫る容易ならざる事と、それを獲得した後の絵画の楽しさ自由さを熱心に説いて下さいました。かなりモチーフから解放されて自分の感動を描けるようになったと思える現在まで、実に遅い稔りではあります。

なぜ絵を描くのですかとの質問にマティスは、私の感動感情、感受性の反応を色彩や形体の言葉に翻訳する為ですと言っています。

それに向かう具体的な方法として、描写しない、線を活かす事を私に課せた山崎先生とのめぐり合いに深く感謝しています。

画風と性格

田坂 鎮男

今年の日立OB美術展で初めて即売会に出品した私の絵が最終日に売れた。

どこに飾って頂くのだろうか、手造りの額に納めた絵は空間にチャンとマツチするだろうか、喜んでもらえるだろうかなど、子供の巣立ちを見守る親のような感じだ。

セザンヌ、中川一政氏の模写から始めた絵画歴も六年が経った。

絵がきれいなので（実はこれだけが取柄）お蔭様で結構好評である。どんどんお譲りしてまた描けばいいと先生はおっしゃいますが、なかなか手放す気になれません。そこで思い付いたのが絵の貸出である。季節や前の絵とのバランスを考慮しながら数カ月毎に掛け替えている。掛け替えの度にわが子に久々に会うような気持である。

今ではこの貸借でお互いが満足し、これが私の制作意欲になっている。

最近ゴッホや珠子さんの真似までして何とか画風を変えたいと思っているが、なかなか・・・。

絵が好きだということ

建 脇 勉

現在、四つの絵画グループに参加している。どの会でも「絵がお好きなのだな」と感ずる方が多い。上手下手にかかわらず、本能的に好きなのだと思う。

好きな方は子供のころに絵をほめられたり賞をもらったりして自信をもっておられる。

私は子供のころ祖母に育てられた時期があった。あるとき、毎日使っていたクレヨンがちびってきたのでおばあちゃんに買ってほしいとねだった。祖母は上手に描けたら買ってやると言うので、祖母に従順だった我が家の猫を描いた。買ってほしさに真剣に描いた。

作品を見た祖母は「これは生きている」と言ってほめてくれた。このときの記憶は、一生懸命描けばうまく描けるのだということだった。

会員の皆様には、きっと子供のときにほめられて好きになられたことと思います。

本会は立見先生を迎え、各人の過去の作品を覚えてもつらて、その上達ぐあいや努力の向上を評価してもらっている。親が子供の成長を関心を持ってみてくれているように。

私も大いにエネルギーを傾注してより充実した作品を描こうと思う。

旅と絵と

田中 快吉

絵は描くのも、見るのも、昔から好きだったが、それに没頭するほどでもなかった。しかし、職場に近い三越の絵画展や、日立OB美術会展などは欠かさず鑑賞した。

そこで好みの絵に出会ったりすると、何か得をしたような気分になったものである。絵が生き甲斐のかなりの部分を占めるようになったのは、退職後である。

きっかけは海外旅行だった。あるツアーで同行した画家さんが、各地で、短時間に手際よくスケッチした作品の出来映えに、すっかり感動し、その気になった。

それ以来、年中行事となった家内との海外旅行に、スケッチが加わり、旅の楽しさも倍加した。

そして、「カメラで撮影した風景は忘れるが、描いた風景は忘れない」ことに気付いた。今は、旅先でのスケッチを基に油彩画に取り組み、至福のひと時を満喫している。そして、かのチャーチルさんの年頃まで絵を楽しみたいものだ、と、欲張り願望を抱いている。

私と多摩川

田邊 明

油彩画を描くようになったら、先ずは子供の頃から親しんでいる多摩川の風景を描こう
と思っていました。

多摩川は山梨・笠取山を源流にし、奥多摩から東京と神奈川の間を東京湾口羽田に流れる
全長一三八キロの一級河川です。

私は十歳頃まで川崎・中原区の南武線沿線の近くにNEC玉川がある多摩川の傍の町で育
ちました。その頃、河原は焼夷弾の残骸で区分けされた芋畑、麦畑でその間をぬけた川辺
で友達と日が沈み暗くなるまで遊び、怒られることが多々ありました。

その後、三キロ程離れた所に移り、今日まで過ごしています。

若い頃は思い悩む時など土手や河原に出掛け、寝転び空を眺め気分転換をしたものです。
特にここ数年、景観が激変し、ある面寂しさを感じています。

河川敷に設けられたサイクリングロードなどをゆつたりと散策しながら四季折々の天候、
時間と共に移りゆく眺めを、また、多くの支流流域の景色を観賞しながら今後も私なりに
多摩川への思いを描いていきたいと願ってます。

近郊画題

土屋 久一

国分寺市日吉町（旧戸倉新田）に居を構えてから、かれこれ三十六年になる。この間、勤めは日立から職訓大へと移った。

訓大に勤め2年位経って余裕ができ、春と夏の休暇中は内外の美術館、休日は絵筆を執る事が楽しくなり今日に至っている。

市内には、武蔵国分寺公園、殿ヶ谷戸庭園の次郎弁天池、武蔵国分寺跡、真姿の池湧水郡と弁財天、お鷹の道（この道に沿って景勝院国分寺本堂を中心に薬師堂、楼門、万葉植物園等がある）。また、市内各所に散在する中小の公園には、樹木、草花など多く、モチーフには事欠かない。自宅から徒歩十数分の処に、一橋大のキャンパスがあり、樹木、池、新旧建物等が絶妙に調和した風情は、格好な画材を提供している。

構内には、設立当時の兼松講堂、守衛所等、古い建物が幾つか残されており、油彩、水彩、スケッチ等の画家が多い。このほか谷保天満宮と城山公園、桜と銀杏の大学通り等、個性豊かな画材が豊富である。

はじめて描いた絵

徳永 久子

私の絵画との付き合いについてお話しさせていただきます。

もう二十年近く前、子供達に手がかからなくなり経済的にも少しゆとりが出来て、自分の楽しみとして何か取り組みたいと思いました。特別なとりえもなく、また何事も長続きしない私に何か出来るかと・・・。

小学校の頃、何回か先生に絵を褒められたことを思い出し、油絵など触ったこともないのに躊躇することなく、近所の画家の先生を訪ねました。一枚、絵を描いて持ってくるようにとのこと、台所にある野菜を画用紙いっぱいに水彩で描き持つていくと。うっ、これも絵になるのだな・・・。昔を思いだすとおっしゃられ油絵の道具を揃えて下さいました。絵は描けば描くほど難しくなるようです。

最近、主人が私のことをだんだん生意気になって来た、年のせいかな、などと言いますが、たくさんの方の日立の皆様と知り合いになり、少し利口になったのではないかと思います。

私と絵画

富木 太郎

古稀を迎えた先日、小中学校の同窓会に出席し、幼馴染みと京都嵯峨野を散策、有名な竹林や嵐山、それに保津川溪谷と目に入ってくるものが我が故郷を思い出させてくれる情景でした。

小学校の頃、紅葉の絵を描いて入賞したり、中学校の頃、図工の時間、見えもしない富士山をわざわざ学校近くの川辺に行って描いたり、そのため先生に怒鳴られ、罰として教室の掃除をやらされた事が昨日のように思い出され懐かしく思いました。

当時、絵はすごく好きで美しい故郷の情景でのんびり描くのが夢でした。

ある時期、滝を描いて表現方法はどうかすればいいのか、その難しさに悩んだ事もあります。小さい頃の絵は現在、自分の所にはなく確認できないけど、ある秋の風景画等を中学の恩師が保存している事を聞き、機会あらば、田舎のスケッチ旅行を兼ねて、昔の絵と今の絵を交換できればと、頑張っている今日この頃です。

作者の心

富永 哲夫

以前スペインに行った。バルセロナでミロ美術館に行こうとしたが、休館日だったので街中に出て、ガウディが設計したカサ・ミラ（ミラ氏の邸宅）を外から眺めたりした。

このカサ・ミラは直線部分のない曲線だけの建物で、随分自由な発想が出来るものだと、一種の感動を覚えた。

それから、マドリッドのプラド美術館に足を伸ばした。ゴヤの「わが子を食うサトゥルヌス」の実物が観たかったからである。彼の絵としては、ほかに、「砂に埋もれた犬」や「魔女の集会」があった。これらは、作者ゴヤ自身の情念を絵にしたものではないかという気がしたし、こういう絵の描き方もあるかとも思った。

話は替わるが、とろけた懐中時計が描かれているダリの「記憶の固執」は、画集から小さい絵であることは承知していたが、それを上野の森美術館で実際に観た時は、本当に小さかったので驚いた。こうしてみてみると、絵は物を描くよりも、むしろ、作者の心を描くものらしい。

私と絵画

中川 清（電）

昭和四十〇五十年代、欧州・中東への出張が多かった。

中東から成田への直行便は少なく、プロジェクトが英・独のコンサルタントだったから帰国便は欧州発で、出発時間帯はいつも十五〇十七時だった。

空港のチェックインまでの時間に余裕があれば、トランクをエアターミナルのロッカーに入れ美術館に急いだ。

パリやアムステルダムのエアターミナルからルーブルやアムステルダム国立美術館へは歩く距離だった。何時も時間に追われ、見て回る部屋は限られた。

毎回見たい名画のところへ急ぎ、日本のパックツアーのガイドの説明を盗聴させてもらい、その後は自分のペースで見て回った。

定年の数年前、毎年、欧州にスケッチ旅行をしている札幌の歯医者さんを知りその画集を入手した。画集にある絵の大半が何処の風景か分かった。

私もそれらの地を再訪し画を描いてみたいと思った。これがきっかけで絵を習い始めた。

故郷を描く

中川 清（化）

生まれ故郷の信州は、いつ行ってみてもすばらしい。南アルプスと中央アルプスに囲まれたわが伊那谷は東に赤石山、西に駒ヶ嶽を遠くに望み、前山、段丘が前景を成す。四季折々の色調と調和が鮮やかに展開される。

郷里を離れてすでに六十年。毎年、少なくとも一回は訪れてきた。その都度、何とこの地は美しいんだろうと感嘆させられる。「描いてみたい」と絵心が刺激され、興奮が治まらない。何か体の細胞が騒ぐのが常である。

今年の九月、この伊那谷から中央アルプスの峠を越えて木曽に下りた。京都から江戸に通じた中仙道の街道に出る。今の十九号線である、幕末、降嫁する皇女和宮が沈鬱な気持ちで江戸に向かった道でもある。この道を下り、木曽福島に近い「寝覚めの床」に着いた。この場所こそ木曽川に在る奇石が群がる。この風景が一見して神が創った鬼手の作品に見えた。夢中になって描いた水彩画を十月OB展に出品した。

以前、旧中仙道奈良井宿の「夕日の前」の絵をものにし、同じくOB展に出品させて貰ったことあり、これで私の木曽を描いた絵は二つになった。機会を得て次は藤村の故郷の妻籠と、何といっても木曽の象徴する御岳山を描くことを夢みている。

不幸にして七年前から不治の病にかかり、その合併症をして歩行困難、又、直近は筆を持つ右手の硬化現象に悩まされている。後、いつ迄この痛さにつき合うのか分からないが、決着がつく迄故郷の美しさを描き続けていきたいと思う今日この頃である。

福原さんが居た

永島 敏雄

私の手元に今も残る「宝物」――包紙、広告等の一部を五×十センチ大に切り取った手製の色見本である。

私が月例会に入って間もなく「色の参考に」とこれをくださったかたが福原さんだった。私はそれに絵を描くということの「根っこ」を感じた。

欧米やヒマラヤ等での膨大なスケッチをもとに福原さんの描く絵は強くおおらかであった。「あなたは何を描きたいのか」といつも皆を激励された。

OB展には連日朝から常駐し、みんなに話しかけられた。「世事の躁言は控えよう。ここでは絵の話しをしよう」と。

哲人の如く思索し、作家の如く旺盛に分筆を振るい、職人の如くこまめに動き、休むことなく驀進された毎日。

米寿を迎え、なお初心に戻り静物画に再挑戦されたその作品「黒と白のエチュード」のみずみずしかったこと！その絵を抱えたままOB展の帰途、突然天に召されてしまった。

よちよち歩きだった日立OB美術会に太い背骨を作られた人「福原さん」本当にありがとうございました。

私と信州の風景

中山 英征

私が初めて信州を訪れたのは二十歳、黒部峡谷の第四ダムが完成した直後だった。ダムから宇奈月まで下廊下といわれる峡谷を二日間かけて踏破した時の感激は一生忘れることができない。

季節は十月中旬で山頂には初冠雪、峡谷から足元の草まで全てが紅葉し、その素晴らしさはこの世のものとは思えないくらいに素晴らしさだった。

この感動をいつかは絵にしてみたいとは思いは募るばかりだったが、五十歳にして絵を描く機会を得てカルチャーに通うものの、静物や人物では感動を得ることができず、結局は風景画を好んで描いている。最近では北アルプスの雄姿に感動を覚えて安曇野と自馬に通い詰めとなっている。

風景は季節によって色や表情が変わり絵の具を選ぶ時やキャンバスに写すときはいつも楽しい。又、その上、土地の風土や人情にも触れ夜は郷土料理で一杯やるのが何よりの楽しみとなっている。

わが油彩画の揺籃時代の思い出

中村 高章

小学校五年の頃、下校途中、わが家の見える処で、一人の青年画家がわが集落を描いていました。私は絵が大好きだったので、画家が描くのを止めるまで、側で見えていました。

画家は道路には停まっていないう赤い自動車など、勝手に描き込んでいました。

私は子供心に、絵は見たそのままでなく、自分の思うように描けばいいんだな、と強く絵心を誘われました。そのときの画家は、後に画格の高い画家となった庫田毅画伯だと、ずっと後になって知りました。

私が油彩画を描きたいと、思うようになった原点は、青年画家の油彩の筆の運びを、長時間観ていたときだったのではないかと、思っています。

学生になってから、せっせと油彩画を描き始めました。その頃は描き終わったあと「われながら良く描けた」と思うのが常でした。しかし一週間経つと、その絵はもの足りない絵だな、と思うことも常でした。この繰り返しですが、上達への一つの道だった、と、当時の自作の絵を見るたび、その思いを深めています。

昭和三十七、八年になって、本郷惇画伯（当時一水会）の知己を得ました。

従来の描いて直ぐ飽きが来るレベルから、脱皮する貴重な機会となりました。

先生を私の車に乗せて近傍の山里や海辺の絵を描きに出掛けたことも屢々でした。

その描く現地はまさしくマン・ツ・マンの絵画教室で、私にとって何と幸せなことだったか。「作者が何を描こうとして描いたのか、まず判る絵でなければならぬ」、「水はブルーで描くと決めてはいけぬ。黒で描いても、水に見えるように描かなければいけない」 「絵の具の特性をよく知っておくこと。混色すると変色するものがある」等々いろいろ教わりました。先生の指導を得たのは四年間ぐらいでした。主に仕事の関係で私は暫く絵から離れました。あのまま先生の指導を受けていれば、今少し、ましな絵が描けたのではないかと最近キャンバスに対うたびに思います。

先生の警咳と穏やかな風貌を懐かしみながら。

私と絵画

野村 直浩

退職したら何か新しい趣味持ちたいと思っていた。その時が来てヒントになったのは、友人がくれるスケッチの絵葉書であった。私もこんな絵が描きたいと一念発起し、NHK学園の門を叩いた。先ず水彩画の入門コースを通信講座で学ぶことにした。

以来、四年余り、「デッサン」や「旅のスケッチ」等と進み、現在は「絵画マスターコース」という講座で学んでいる。

学園の海外スクーリングにも参加し、これまでにドイツ・オランダ・フランスなどの主に田舎の村を訪れた。中世から残る教会や城塞などの歴史的建物や自然の風景などを描いてきた。講師の先生や同好の友と食事を共にしながらの語らいは、この旅の楽しみを増幅させてくれた。

日立OB美術会には、二〇一〇年六月に入会させて頂き、第四十九回的美術会展に初めて出した。

先輩諸氏の作品に感動すると同時に、間口の広さと奥深さを感じた。これからも健康を維持し、趣味として絵の旅を長く楽しみたいと思う。

絵の世界に入って

萩原 茂

会社を辞めた時、これからの長い時間をどう過ごすかと色々考えた結果、先輩達の誘いもあり、恐る恐る絵の世界の門を叩く事にした。しかし、そこで聞いたり描いたりしている内に段々と興味が湧いてきて、いつの間にかすっかり絵の世界にのめり込んでしまった。絵を描くことも楽しかったが、私は、それにも増してこの世界で老後を若者のような情熱を燃やしている多くの仲間達に出会えたことが嬉しかった。

私がそれまで過ごしてきた会社生活は、建前が先行する裱社会で何となく息苦しさも覚えていたが、この世界の人達は明るく自由で本音で語り合い、個性を大切にしていながら他人に対しても常に寛容で心安らげる場所を提供してくれた。

私の人生も「起承転結」で言うと、既に「結」のそれも終わりに近い処まで来て居り今はその結び方を考える時だと思っているが、私はこの人生最後の貴重な時間に右脳型の多くの仲間と共に過ごすことができたことを大変嬉しく思い感謝している。

日立OB美術会も今年、五十回展を迎え会員数も百二十名を越えるまでに成長したが、これは、若い委員諸君の積極的で前向きな努力の賜物である。まだまだ、この会は成長を続けていくに違いないと信じている。

絵画と私

長谷見 次郎

二十年ほど前、納戸を片付けていたとき一枚のキャンバスが出てきました。画面はひび割れて絵の具の一部は剥がれていました。裏に昭和二十七年秋とあり、私が二十歳の学生の頃、近くの沼を描いた油絵でした。思い出すと中学、高校とクラスを共にした悪童仲間の一人で、当時芸大の学生だった親友―小松崎邦雄―（既に故人）の影響を多分に受け、青春の想いを一気にぶつけた絵でした。

その後、四十年間、絵とは無縁な機械の設計と売り込みに人生の半分を費やしました。退職後描き始めた絵は人の眼を意識した嫌な作品ばかり。当時の純粋さは何処にいったのでしょうか。描いても描いても納得出来ません。何時か無心で自分の絵を描きたいと思いません。二〇一二年一月で八十歳になります。

エー（絵）とあれこれ

林 肇 志

子ども時代は戦時のため学校での図工が少なく、絵に親しんだ記憶は戦後からです。入社後も、ひとりで時々、風景スケッチ等していました。

そのうち日立OB美術会創設に関わられた福原さんが茂原に赴任されて「絵を描こう会」を開設、会に参加して油彩に親しむ機会も得ました。

それから細々と続いて約五十年余り。長く続けたほどに大した実績はなく、初期は都美術館での全国勤労者美術展出品が何回か。千葉県展に出品、まぐれに入選したことも。

四十〜五十歳代は仕事主体で絵は年に数点ほど細々と継続。退職後に描く機会が増え、日立OB展には九十七年から参加（当時は鹿友アートサロンが会場）。居住地の茂原には、私たちも利用できる市立美術館があり、年数回の美術展に向けての制作もあります。

こうした作品発表の機会に恵まれ、ひとりでも、また友人とでも楽しめる趣味に巡りあうことができて、良かったと感じています。

絵を描く環境

林 寛

正に、六十の手習いで水彩画を始めて六年になる。また日立OB美術会の先輩会員に勧められて、日立OB美術会に入会して満五年になる。これまで全くの自己流で描いてきた所為か、仲々、上達もしないし自分でも納得いくように描けない。

年二回の日立OB美術会の出展に七転八倒し、四苦八苦している体たらくである。

先輩からは、数多く描くことが上達の道だと示唆されるが、自身が描きたくなる画題がなかなか見つからない。

また自己流では上達は望めぬから、師匠について習った方がいいと勧められるが、習うべき師匠の心当たりはなく、途方にくれるばかりであった。

そんな折、昨年六月に先輩から先輩の知人の水彩画の先生を紹介していただいた。

早速、この先生の主宰する水彩スケッチ会に入会し、月二回のスケッチ会に参加することとなった。これまでに、横浜山手のベリックホール、横浜ベイサイドマリーナ、金沢八景枇杷島神社、横浜本牧八聖殿、鎌倉腰越漁港、恵比寿ガーデンプレイス、横浜三溪園等を描いてきた。この半年間で描きたい画題に巡り会う機会が俄然多くなった。

また毎回、先生に作品の講評を受ける機会もあって、自身の絵を描く環境が以前に増して

数段も整ったことに大変喜んでいる。

後は自身の努力次第であると覚悟をしている。

今年の日立OB美術会展には、七転八倒、四苦八苦することなく、出展できればと期待している。良き師を紹介していただいた先輩に感謝する今日この頃である。

日立OB美術会創立頃の話

早藤 一郎

昭和二十五年に労使間にレッドパージを中心とする首切り闘争があり、絵画部も崩壊して残ったのは高橋涼之助氏、伊藤洋氏だけになりました。私とは新山寮の文化祭の仲間です。その後、私は組合の文化部を担当させられ、彼らから助けられることになりました。

当時、日立工場では川崎工場から福原三郎さんが転勤して来られ、美術部の柱が出来ました。夏に部課長にも呼び掛けていただき、大勢参加してくださることになりました。

一方、このころから、日立工場から本社に転勤する人が徐々に増え、東京でも展覧会をやりたいという話が多くなってきました。

苦心して銀座松屋の裏手にある銀座明治画廊で日立工場の展覧会を開催することになりました。この時分には（現）松永事務局長の御父上「東京美術学校（現、東京芸術大学）出身」も参加されて居りました。

私は日立工場から国分工場に移転する目的で工場建設が始まり、工場責任者として出掛けることが多くなっていました。

その頃、私はインド南端のケララ州に変圧器工場建設に立会うためにインドに出張することになりました。デリーの日立事務所所長さんが本社所属の河野長策さんで、本格的な画

家と聞いて驚きました。

インドではケララ州の元電力局局长だったオオメンさんがこの工場の社長に決まっております、その弟が彼の跡をついで局長になったようです。

その娘さんにも私は歓待されました。彼女は当時、高校生でしたが私が帰国するときには大学生になっていたと思います。

インド少女として色は黒いが目がパツチリした魅力的な美人でした。帰国の折、記念に私は彼女をスケッチしました。その時の油彩画が私の手元に今もあります。

その当時、OB美術会には、駒井健一郎社長、日立化成の藤久保三四郎社長ご夫妻、足立輝吉さん、水上亥三さん、久保田巖さん、福原三郎さん、松永隆さん等がいました。

建脇勉さんは十四回から、山本衛さんは十五回から、大藤啓子さんは十六回からの参加です。

私と日本画

平井 一次

少年時代、絵（クレオン）を描くことが得意でしたが、戦争激化に疎開、転校等で描く機会もなく、六十四歳で退職するまで描くことには無縁でしたが、退職後、絵を描くことを夢としておりました。

六年間のシンガポール勤務に日本の伝統芸術（能、歌舞伎等）に関心を持ち始め、また家内が子育て時代から油絵を描いておりますので、その後追いは嫌だ！ と日本画を始めました。学ぶなら基礎からをと、京都造形芸術大学通信教育部日本画コースに入学、実技経験が無い為、中々課題作が合格せず、五年間で漸く卒業しました。主任教授（京都画壇の重鎮）が一回り年下、年数回のスクーリング参加の同級生の大部分は二十歳〜六十歳台の女性で、小生は最高齢、唯一の男性という事もしばしばで楽しく学びました。

卒業後も研鑽を続け、日展や院展に入選を果たした同級生も居りますが、小生は卒業制作がピークで水準の維持に四苦八苦です。

横浜に転居して三年、湘南地区には日本画を二十〜三十年と描いている方が多く、水準も高く、横浜や鎌倉の公募展への応募が新しい刺激となっております。

絵画は音楽に負けるか？

福室 正

「絵画は音楽に負ける」昭和洋画壇の重鎮、中村研一の言葉という。音楽に涙する人は多いけれど、絵で泣いた話はめったに聞かないということらしい。

朝日新聞の天声人語に載っていた。この度の東日本大震災（平成二十三年三月十一日）の被災者の報道を見て、確かにそう言う所があるかもしれないと言う思いをもった。

避難所暮らしをする人々を慰問する為に高校生のバンドが演奏し、それを聴いていた被災者の何人もが涙していた。高校生の中に親を津波で亡くした人がいたと言う事も涙を誘発したのかも知れない。曲が「上を向いて歩こう」だったからかも知れない。

いずれにしても音楽が涙を誘ったのは間違いない。その場にどんな素晴らしい絵を持ってきたとしても多分それ程の感動は呼ばなかったのではないか。

しかし、絵も観た人にその前を立ち去り難い感動を与えたという話は決して少なくない。絵は対象物（風景など）との一対一の対話から生まれ、見る人も絵との一対一の対話をする。だから、絵を観た人の心に絵のメッセージが伝わり、絵との対話が生まれれば、涙を流さなくともそれで充分音楽に対抗していると思う。

私自身は絵を好きで描いているのであつて特に音楽と競争する積りもまたその必要も全くない。

観ると描くとは大違い

藤岡 旭

海外出張が多かったため、若い頃から週末の美術館（欧米）通いが多かった。手軽に暇潰しできること、外国語から開放されることなどからの不純な美術館通いだったが、優れた作品に感動し色々な思いに耽ることができた。でも絵を描いてみたいとかその参考にしたいとかは全く考えなかった。

日立を定年退職し大学に勤めていた六十五歳の頃、某美術展でのお誘いで水彩画のレッスンを受けることになり、その後、意を決して日立OB美術会に入会した。

水彩画から始めたが度重なる書き直しに脱帽し、修正容易な油彩画に転向した。

しかし、油の匂いと肌のかぶれに困り果て、今は水で使えるホルベイン工業（株）の絵具 Duo（横着な美大生に人気）を使っている。手軽だが今もって使いこなせず苦労している。苦労話と私の作品例については私のホームページをご覧ください。「キヤメロン藤岡」または「藤岡旭」で検索できます。観ると描くとは大違い、描くことの難しさを痛感しております。

ロンドン展の想いで

藤岡 健夫

この時の海外展の英国旅行参加者は十九名で会場はロンドンの中心部から西方約四十五キロ程のメイデンヘッドという都市であった。

九日には当市市長夫妻他を招待してオーブニングパーティーが盛大に開催され、後の三日間は自由時間でオックスフォード、ウィンザー城、ロンドン市内観光、テムズ川舟遊などに参加し、大変収穫の多い海外展ツアーであった。

メイデンヘッドはテムズ河に沿った都市で河畔には大きな敷地にある別荘のような建物が並びヨットが係留され柳が川面に枝を垂れ大変落ち着いた風格のある街であった。

ここでは日本に見られるような安っぽい建物が全く見当らない。

その理由を現地で尋ねたところ、この辺の土地は卿とか称せられる人々や公共のもので賃貸にあたり、その景観について厳しい規制を布いている由であり、考えさせられた。

私のスケッチの仕方

藤本 元明

私のスケッチブックは、六号Pが中心になります。

サイズが片手で持ち、対象の風景に向けると丁度、私の視野と一致するからです。カメラのレンズにすると七十ミリから一〇〇ミリに当たります。

筆記具として、鉛筆は使わずダーマトグラフを使用します。消しゴムで消せないため、「早描き二〇分」が可能になります。

色彩が必要なときは、記憶にとどめる色を透明水彩絵具でちよつと塗っておきます。現場で仕上げたいときは、二〇分程度かけて彩色します。それでも、六十分以上は掛けません。

書き溜めたスケッチから、大きめの作品に仕上げるためには、必ずカメラでも記録しておきます。大きな作品に仕上げるために、画面に取り込むための細かい資料を撮っておかなければならないと考えるからです。

一枚のスケッチに時間をかけるより、沢山描く方を優先させているためです。動き回らず、前横後ろと四方に向いて数をこなします。

私と絵画

二村 邦子

私は画面の中では、自分の好きなスタイルで、好きなものを描きたいと思っている。あるときは、それは実在するものではなかったり、風景や花や人物を描いても実際とはおよそかけ離れている物を描いている。画面の中では、どんな風に描こうが、私が支配者なのであるから、だれも私の自由を奪えない。

使うメディアも、絵の具だけではなく、色々なものを使う。墨も使うし、特殊なインクを使ったりもする。筆も、箒を分解して、自分だけの筆を作ったりする。

画面は私の精神を自由に遊ばせるのに格好な場所である。

時には、自分で描いた絵が気に入らない方向に進むことがある。そういう時は、自分の好きな作家の絵からヒントを得て、解決できる時もある。またあるときは、全くうまくいなくて、絵を潰してしまうこともある。自由に描くとはいっても、そこにはいろいろ難しいことがある。だから絵を描くことは面白いと思う。簡単だったらつまらない。

日立OB美術会との出会い

夫馬 英二

人生において大切なもの、重要なものに出会というものがある。小生、今日迄数えきれない程、多くの出会に恵まれ、学び、教わり、体験を得、それが貴重な財産となっている。しかし、その中で比較的出合いが少ないものに文化面があり、一つが絵画であった。

それは「退職後は好きなことが出来る自由がある」との思いと、楽しみとして先送りしていたことでもあった。

しかし、或る日、友人の誘いを受け近くの絵画教室を見学した折、生徒と教師間との対話が楽しみなながらも真剣に受止められ、キャンバスに向き合い、一つの答えを出すという雰囲気共感し、この未知の分野に挑戦してみようと。これが絵画入門のキッカケとなった。それから約十年余、スケッチしたり、各地域をまわって人々と出合い対話を重ねたり、また、成果を展示して評価いただいたりで時を経たが、満足に至らずその内、関心が薄れいつしか絵から遠ざかっていた。そんな折、昨年、社友会で思いがけぬ友（OB美術会、栗根委員）と出合い談笑しているうちに、本OB美術会を知り、紹介いただき、やや遅すぎる感がありますが、ご厄介になることになりました。

これからは先輩諸氏のご指導を受けつつ、小生なりに、絵画入門当初から心掛けてきた「光と影」をテーマにとして勉強させていただき、人生の一ページとなれば幸いです。

私の絵画

堀内 節子

油彩を描き始めて四十余年、通信教育なら家事と育児の合間に勉強ができると始めたのだが、子供のころから絵を描くのが好きだったので忽ち夢中になった。

絵を描く様になって景色や物もよく見るようになったのか、世界が二倍に広がった様に感じられた。

地元の絵画グループ活動、中央の公募展出品、美術鑑賞、写生会、スケッチ旅行、作品展覧会等と、充実した楽しい日々であった。今は、車で日帰り出来る範囲で友達とスケッチに出掛け、皆で楽しんでいる。

見える通り実際の形や色に拘っていたのですが、一九八九年、松濤美術館で木村忠太展を見て衝撃を受け感動しました。その後、だんだんと描き方にも変化が生じ、今では見る人が変な絵と思うかな等と気にすることもなくなり、心の思いのまま、描きたいように自由に描くようになりました。

今回、これを書くにあたり、来し方を振り返り、絵があつたお蔭で辛苦も乗り越えられたと思ひました。

私と絵画

堀内 利子

子供の頃、近所の借家に「画伯」と呼ばれる人が住んでいた。

何分、子供だった私は「画伯」が何かも分からなかったのだが、一風変わった其の家を時々見に行った。部屋はいつも絵の具やボロ布でちらかっていて、家族はその部屋の片隅で食事をするといった具合。今思えば、家全部がアトリエの様だった。

画伯はダークな色の上着、長髪にベレー帽、いつも厳つい顔で、キャンバスと格闘するように絵を描いていた。私は多分、匂いが好きだったと思う。いつか手に入れて触ってみたいと思った。

姉は画家志望だった。高校時代は絵を習いに水戸まで通っていた。人目を引く出で立ちで画板を下げて歩く姿に少し憧れた。

美術学校を希望していたのに、「女絵描きは食えん」の親の一言であきらめ洋裁学校に行った。泣いていた姉が気の毒だった。

我が子に手が掛からなくなった三十代、念願の油絵を始めた。以来、大好きな絵の具の匂いの籠った部屋で、楽しく絵を描いている。

私と絵画

本多 昭雄

私は在勤中絵筆をとったことはありませんでした。

しかし、一つだけ今でもはつきりと思い出せることがあります。小学校時代に学校で描いた絵が選ばれて展覧会に出品された事がありました。嬉しかったせいか、絵の構図までもはつきりと思い出すことが出来ます。

この記憶が根底にあるせいか、絵を見ることが大好きで何冊かの絵画集も購入しました。昭和四十三年に日立家電の貿易部に転属になり、最初、ニューヨーク滞在をかわきりに帰国後も欧米各地の現地法人に長期出張することが何回もありました。土日を挟む時はその土地の美術館を見て回りました。本の中で見た絵画が目の前にある驚きと喜び、しかも、むき出しで展示されている感激等々、今でも鮮明に思い出せます。

描くことが面白くなってきたのは四年ほど前からですが、新しい描き方等々、未知の分野への挑戦と期待に燃えています。

グループ展のための絵画の配置決め

松岡 潤

私は定年退職後、自分の住んでいる神奈川県県央の絵画グループ「勝美会」で風景写生を楽しんで来た。

また平成九年頃から日立OB美術会にも入れて頂き絵を学んで来た。その間に、夫々の会の展覧会で絵を会場の壁面にどう配置するかに関して経験させて頂いた。

勝美会では、五回ほどの展覧会の配置決めを任されて来た。関連した仕事の中で、少し工夫を要したのは、一人当りの壁面幅Wの中に展示できる絵画の大きさと枚数の全ての組合せを、展覧会の三々四カ月前に全会員に示しておく事だった。Wが三メートル半位の場合で可能な組合せは約二〇〇通りにもなった。

日立OB美術会では陳列委員会で、広く学ぶ事が出来た。画材は油彩だけでなく、水彩、アクリルなど多種、画風も幅広く異なり、また壁面にも部屋での位置や照明の具合の良し悪しもある。

不公平を極力抑えるための多面的な考慮が要る。これらの事を学び、体験させていただくことができたことを感謝している。

父の影を歩む

松永 徹也

父親が美術学校を卒業し、油絵を描いていた。しかし、戦争の真ただ中で、絵を捨てて会社員になった。

子供時代は父の影響で、私も何となく絵が好きだったし、弟の一人は絵描きになりたがったが、父は絶対に認めなかった。その父が日立OB美術会の設立にかかわっていた。第二十回展（八十八歳）迄出品していたようである。

私も六十五歳で会社を卒業し、念願の絵を描くべく、カルチャーに入った。間もなく鷺尾さんのお勧めで、本会に入会させていただいた。

当時、父は九十六歳の寝たきりで、一〇〇歳で亡くなるまで、家で介護をした。そのため手間のかからない水彩画を描くことになった。従って私には絵について生意気なことを語る資格もないし、どんなに努力しても父の時代の重厚な絵は描けないし、時間もない。私の目標は水で、如何に魅力ある色彩を引き出すかに特化している。父から絵の指導は受けなかったが、こうしてこの会で絵を描いている自分は父の影を何時しか追いかけているようである。

絵画とラジオ健康体操

松 本 茂

絵画教室（六年前）入会一年後から隣の朝のラジオ健康体操に通っています。

毎日家を5時半過ぎに出発、近くの大学構内の桜櫨の林を通り野川（日立中研が源流）沿いの散歩道を歩き、六時過ぎに隣の小学校の校庭に到着、市民健康体操、ストレッチング体操、ラジオ健康体操をやっています。

往復で徒歩約一時間、体操三十分の行程です。自宅に戻ってから牛乳二〇〇ccとヨーグルトを飲んでいます。

信州大学の遠藤教授は速歩のあと牛乳が大変体に良いといっています。NHKでも放映されました。ラジオ健康体操を始めて三年を過ぎた頃から体重が約四キログラム増えBMIが二十二になりました。

体調も良く絵のスケッチの時間も取れ一石二鳥です。

一昨年古希を迎えました。昨年日立OB美術会に入会させて頂きましたが、これからも「隣のラジオ健康体操」で元気を貰い好きな絵を一生懸命描いて行きたいと思っています。

私と日立OB美術会

松本 行夫

私が日立OB美術会に入会したのは、平成二十一年四月ですから、まだ新人ですが、この会については発足当時から見守っております。

私が日立家電（株）に勤めていた頃、一緒にいたIさんという先輩の方がおりました。

この方が、昔の職場の仲間と絵の展示会をやるということとで「銀座明治画廊」でグループ展を開いたのです。これがこの会の始まりでした。

今、一〇〇名を越す会員数になるなど想像もつかない事でした。Iさんは他にも絵画サークルを作るなど、人望も厚い方でした。

同じ職場にいた私にとっては、画廊にお客様が来ると勤務中でも出て行ってしまうなど、困った面もありました。私がIさんから学んだことと言えば、自分は絵を描いても職場にいるうちは個展はしない、あくまで趣味として描くべきだ、という姿勢が出来たということです。今では、元日立という共通の職場を経た人達による趣味の場として楽しく参加させて頂いています。

旅と絵

三村 実男

平成五年、会社をやめてから趣味として最初に浮かんだのが絵を画くことであつた。早速、地元の洋画クラブに入りカルチャーセンターに通い、日立OB美術会は社報で知り入会した。人物、静物など描いたがやはり風景を重点とし国内の一泊スケッチや海外旅行には積極的に参加し、行ったときには必ず一枚仕上げることにした。

行く前に調査し現地ではそれを修正し、すばらしい所があれば追加して仕上げることにしている。

海外へはNHKカルチャーで南フランスのプロバンスに行き、セザンヌやゴッホが描いた場所を訪問して六枚、水彩で仕上げた。

昨年七月、海外旅行は最後と考えてカナダに出かけ、東部のナイアガラからカナディアンロッキーを経て西部のビクトリア市を訪問し、F一〇号油彩で十枚仕上げ、今年の日立OB美術点に六点出品した。

最近はここ数年、中国に行く機会があり、今まで北京、西安、重慶、同封などへ行ったので六枚、F一〇号油彩で完成させた。次回のOB美術展に出品したいと思っている。

私はこうして絵を始めた

宮本 裕子

子供の頃から絵が好きで、何人ものよい先生に出会いました。

中学の時の菱田先生は 私の絵画生活に強い影響を与えた恩人です。菱田春草の子孫でタップダンスをしたり三味線を弾いたりする魅力的な先生でした。

ヴィーナスやアグリッパのデッサンを木炭と食パンのねり消しを使って何枚も描かされました。

美術部の合宿では、河口湖の向こうに見える富士山と緑の屋根の洋館を描きました。

先生は更に私達を景色のよい三つ峠まで連れて行きたくてトラックの運転手に頼み、荷台に乗せてもらった事を覚えています。木立の間から見える富士山はセザンヌのサントヴィクトワール山の絵の構図に似ていました。

退職後、菱田先生のアトリエにお邪魔して新作を見せて頂きました。

シンプルで晩年のボナールのような無邪気な絵でした。

要らないものを全て除くとききれいな本質だけが残る。私もいつかそんな絵が描きたいと思いました。

私と絵画

向山 秀次

遙か昔、高校に入学したとき、何かクラブに入らなければいけないとのことで、わりに絵が得意だったので絵画クラブに入ったが、進学のための勉強でクラブ活動は一年で辞めてしまった。

以来、常々、絵には関心を持っていたが、定年退職するまで一枚も絵を描くことはなかった。ただ絵画展等は機会があればよく見に行った。

定年が近づくにつれ無性に絵を描きたくなり、関連会社への就職も辞退し、退職後は絵を描くことに没頭した。

まず市の文化協会主催のデッサン教室で基礎を習い、水彩画、油彩画、パステル画と画材の範囲を広げていった。

現在は市のミュージアムで仲間約三十人と、月に二回裸婦のクロッキーを行い描写力を培うよう努力している。

絵に對する思い

村上 啓一

中学生のころ倉敷の大原美術館を見学して初めて世界の名画にふれた。

そのあと日立を退職するまで多くの美術館や美術展を巡り、また多くの画集をみた。しかし自由の身になって自ら絵を描きたくなった。

その折、なにごととも十年やればひとかどのものになる”という先人の言葉に励まされて水彩画をはじめた。二〇〇一年であった。

二〇〇四年、昔の同僚で本展のベテランから「出展し恥をかかなければ進歩はない」とそのかされて出展しはじめた。

ルドン、シャガール、ゴーギャン、スーラなどの夢幻性と日本画の線と色の明晰さをたよりに未熟な絵を描き続けている。描くよりも考えているのが長いわき道を歩いている。

喜寿の年に小画集を出すのを目標にしていたが二〇一〇年春 脳梗塞や神経痛を患い二年ちかくを棒にふったので小画集を出すのは傘寿の年まで延期した。

OB美術会全員で一人一作の画集ができればありがたい。

健康のために絵画を楽しむ

村田 肇

前期高齢者入りした三年前、暮れも迫った十二月中旬、言い様の無い足腰の痺れと痛みに襲われた。救急車で運び込まれ、椎間板ヘルニア・座骨神経痛の診断。

退院は春の日差しが感じられる三月中旬と三ヶ月の長期入院。入院一ヶ月は寝返りも打てない痛み、不眠も重なり悶々と過ぎる空虚な時間に焦りの日々。

この苦しい時を救ってくれたのが小さなスケッチ帳でした。

ベットに横たわりながら目に入る身近な物を鉛筆で描いている時間は不思議にも痛みも和らぎ、時の経過も忘れる事ができました。

じつくり観察しながら十日程の間に五十枚程。

水彩画を始めて十年「絵をやっていて良かった」としみじみ感じた一時です。

あれから三年。「健康の有難さ」を思いながら日々心掛けている事がある。

一つは再発防止の為の足腰の筋力強化とゴルフの再挑戦。

もう一つは楽しんで描く自分らしい水彩画の追求。

ゴルフはあと何年？水彩画は後期高齢者になっても楽しめそうです。

私と絵画

毛利 嘉雄

小生の画歴は小学三年の時、自宅近くに在住の故・丸山石根画伯（日展・日本画部門特選二回入選）のアトリエに入室が許され、日本画と水彩画との基礎をご指導いただきました。

小学五年生からは油彩画を始め、中学・高校時代は美術部で主に風景画を描きました。

高校三年の時に工業デザインの世界を知り、幸いにも京都市立美術大学工芸家工業デザイン専攻に入学出来、日立製作所デザイン研究所に工業デザイナーとして入社出来ました。デザインワークが仕事となつて、余暇に絵画の世界に浸ることは皆無となりました。

趣味としての絵画制作はリタイア寸前まで遠ざかっていましたが、二〇〇一年に「日立OB美術会」に入会し、春・秋の展覧会に国内外の風景画（油彩）を出品し、月例の「人物画研究会」でクロッキーと水彩画を楽しんでおり、スケッチ旅行も楽しみの一つで、リタイア生活を満喫しています。

自分が気に入る絵を描きたい

森田 寛二

退職後の生活スタイルをどうするかで随分考えました。

死ぬまでに今まで嫌いだと思っていることを無くしていこう、そして何かを新たに出来るようになったら良いと思い「音楽Ⅱ長唄」「絵画Ⅱ水彩画」「音楽Ⅱコーラス」を目標に掲げました。

絵画については美術館などを見てみようと思い、少しずつ見て回りました。

そして描いてみよう、まずは水彩画を始めようと考えました。水彩画の先生に基本から習い始めました。

いざ自分で描いて見ると美術館の絵の作者の偉大さが遅ればせながら分かってきました。

近いので、上野に行ったり、海外旅行では時間一杯美術館で過ごすようにしました。

今まで、各国の十か所以上の美術館を漠然と見ていたのを後悔しました。

先月、ブラド美術館にいき、時間一杯観て自分でもびっくりしました。

わたしは明るくて、きれいな色の絵が好きです。自分で風景画を少し描いていますが、その内に自分に気に入る絵が出来れば嬉しいなと思って描いています。

個性を表現したい

安田 和治

小学校高学年の頃、自由に描ける絵に興味を持った私は高校時代、初めて油彩に挑戦した。それ以降、学生時代、会社勤めの間は描きたいときに書くだけで自由気ままにキャンバスに向かっていた。

そして、OBになった今、自分の時間を自由に使い、描くことの楽しさを感じ始めている。最近、絵に対する気持ちが少し変化してきた。

まず、絵の大きさだ。描けば描くほど以前よりも大きな絵を描きたくなってきた。

二つ目は完成させる最終段階で手を加えるときが楽しい。と同時に手加減の難しさを感じている。

三つ目は、これまで主に風景画を描いていたので、静物画や抽象画など描いてみたくなってきた。などである。

最近、さまざまな展覧会で作品を見ているうちに、絵の大きさや風景画に拘ることなく、また、納得がいくまで手を加え自由に描いていくことで、何か個性的なものが描ければいいという思いに至った。これからの作品づくりを楽しみたい。

絵画展の思い出

矢原 武 紀

私の絵画の一番の学習方法は各地で開催される絵画展の鑑賞である。比較的最近感銘を受けた絵画展を二つ挙げると次の通りである。

一番目は、昨年（二〇一〇年）八月、「銀座美術館」で開かれた『高島野十郎展』である。一八九〇年（明治二十三年）に福岡県久留米市に生まれた野十郎（本名弥寿）は、八十五年の生涯を、“写实的でありながら、対象をとらえる眼は慈愛溢れる仏教的な要素を含んだ”絵を描き続けた孤高の画家で、「雨―法隆寺塔」と「蠟燭」を目の当たりにした時は感激であった。

二番目は、今年九月、東京高島屋で開かれた犬塚勉展である。犬塚勉は一九四九年（昭和二十四年）に川崎市に生まれ、東京学芸大を卒業後、都下の小・中学校の美術や図工の教師をしながら、『感動ある絵を描くこと』このことその他には何も望むものはない”といった考えのもとに、山の奥深く入り込み、ブナの木や、林、溪谷（大きな岩石や岩壁など）などの自然の絵画制作に力を注いだ画家である。三十八歳の若さで谷川岳で取材中遭難死した。その作品は緻密で力強く、見る者を引きこむ迫力がある。

二人の画家の共通点は、求道者のように、全身全霊で、己の掘み取ろうとする何かに向か

つて挑み続けた生涯を送ったということではないだろうか。

私と絵画

山崎 浩二

後一年で解職を控え、老後の趣味を思案していた六十三歳の夏、孫達がボケたらアカンと言つて簡単に塗れる水彩用具を与えてくれた。

当時私は妻を亡くし一人住まいであり、それを案じての子供らの行動であつた。

早速近景を描き、色を付けてみたが満足出来ずにいた。そこで、昔撮った瑞巖寺の門前の風景を油彩で描いてみたら、初めてにしては我ながら上出来と思つた。

会社帰りに高価と感じたが額を買い、いつものスタンドで飲みながらセットした自作の絵を眺めていたら、隣の客が油絵は画用紙じゃなくキャンパスに描くのが道理だと教えてくれた。それまで私には絵の知識を持ち合わせていなかった。

しかし、門前の石畳の光景のボカシは初めてにしては上出来と褒めてくれた。

これが嬉しくて絵画を老後の趣味に加えたのである。

ちなみに隣の客とは呉市の元の教育長で絵の先生であつた。

今までに七十六枚程描いているが、全て独修画であるが故に、能力の限界を感じている。

これからも

山下 悦三

最近のOB展にご来場の吾が先輩方は口を揃えて「日立にこんなに絵を描く人がいるとは」と驚かれ、我々の盛会を祝福してくれる。

また、往年の日立を知るご来賓方は「日立を見直したよ」と無骨な日立の印象を改めていただく。

そのうえ知人の画家も来られると「皆さんの屈託のない自由な絵が面白い、他にないいい雰囲気だ」と私どもの制作意欲を激励してくれる。

また、会場近くの画廊の女主人は「日立らしい真面目な絵がそろって」と宣伝さえしてくれる。こう皆さんに見られて心嬉しいが、ご来場の方々は今や「日立・絵画展」と見做されているようで、描く筆に責任の重さを感じる。

だから、精進を重ねることは勿論だが、といって歓心を一層深めようと、俄かに技巧に走り奇を衒うことは避けねばならない。

OB展にわざわざ足を運んで下さるのは夫々が自分の絵に境地を開こうと、ひたむきに努力している姿に、これが日立だとみて評価し、喜んでくださっておられると思うのである。我々もまた、生涯の楽しみと熱中するあまり、また、熟達の自信に満足していても、日立

OB美術会に集う我々は「日立は一つなり」の心を片時も忘れず、筆を重ねなければならぬ。斯くして日立OB美術展は着実に歩み続けられると思うのである。

会員歴十八年

山田 徳太郎

「絵を始めるなら早く始めないと後悔するぞ」と福原さんに発破をかけられ、OB美術会に入れて貰ったのは平成六年、六十四歳だった。

秋の展覧会とは別に有志による春の展覧会も始まった。申し込み書の送付、回収から会場レイアウトまで、すべて永島さんに指導して頂いた。

私の発表の場は千葉市展、千葉県展、水彩展OHARAと公募展に広がっていった。

福原さんには「公募展もいいけどな、OB美術会を大切にせよ」と言われた。

残念なことに、福原さんは平成十一年秋に急逝された。松永さん等、有能な方々が入ってこられたので幹事役をお願いし、木戸先輩紹介の水彩連盟展指向の教室に入れて貰って公募展向け制作にのめり込んでいった。指導者、応募、所属団体、画題、作風スタイル創りなどすべてに恵まれ、平成二十二年春、水彩画連盟会員に推挙された。八十歳になっていた。

顧みれば些か感想もあり、別途作文したいと思っている。

そして日立OB美術会を大事にして行きたい。

旅と名水と絵画

山本 信之

昭和六十年代に環境庁が全国の清く澄んだ水の代表的な百箇所を選び「日本名水百選」を発表しました。

お酒大好き仲間の話題になり、平成三年ころから年に二、三回の日帰り、または宿泊旅行が始まりました。北は北海道利尻島の「甘露泉水（せんすい）」、南は沖縄県の「垣花樋川（ひーじゃー）」などの九十八箇所と地元名水・酒造元の仕込水、等など含め数百箇所のうまい水・酒を飲んできました。

そして「昭和の名水百選」をスケッチ画に描き残し、リタイア後に旅と合併しながらデッサン、油彩画教室で学び、スケッチ画を油彩画に描き始めるうちに、平成二十年に環境庁が第二弾目「平成の名水百選」を発表しました。

早々に仲間と旅に出ました。今日まで三十八箇所の名水・酒を飲み、スケッチ画に残してきてますが、年を重ねるごとに酒量が減り、仲間も減り、現在はスポーツジム・家庭菜園の合間の絵筆になりました。

これからは「ゆっくり」しかし「あわてて」旅をするつもりです。

駒井さんのお思い出

山 本 衛

私が日立OB美術会に入会させて頂いた頃は、日本ビルの七階の日立製作所大会議室にパーティションを配置して、美術会展の会場としており、その会期中は駒井元社長が名誉会員でご出展されておられたこともあって、「KOMAI HALL」と称されていた。しかし、残念ながら土・日曜はビルが閉館、そして時間制限もあって、来場者はビル内の日立社員が殆どだったようだ。

平成の時代になり、私は事務局長を仰せつかってから、日立グループ全体の絵画グループにするためもあって、一般のギャラリーを使用することに決め、東京近代美術クラブ画廊に会場を移し、ご来場者の増加をはかった。

その間、私は何年か毎回の美術会展に駒井健一郎元社長の遺作を飾らせていただくため、私の父の葬儀委員長をして戴いたこともあって、私は何度かお伺いしたことのある湘南の御邸へ、お作品を拝借に参上した。

その折も御令室様から元社長の絵に関わる四方山話を色々拝聴したり、ときどき御令室様の秋田のご実家から送ってこられたとの御酒をお土産にいただき、「下手の横好き」と題した元社長の水彩画の画集も頂戴した。

日立OB美術会展に、絵の好きだった駒井元社長と高尾元相談役の御令室お二方をお招きしたことも記憶に残っている。

無言館

横田 一郎

東京駅の丸の内側に、今は駅舎の復元工事のため休館となっている「東京ステーション・ギャラリー」という小さなギャラリーがあった。

もう十数年前になるが、たまたま入館した時に展示されていたのが「戦後六十年・無言館 遺された絵画展」という若くして戦没した画学生たちの遺作展であった。

絵を描きたいという情熱を突然たち切られ、僅かの作品、あるいは未完成の絵やスケッチを残して戦死してしまった人達の作品展である。もう一時間でもよいから絵を描き続けたという気持ちを抑えて筆を置き、自分の愛する家族のため、国のため戦場に死を覚悟して出て行った画家たちの思いが込められた絵でした。

無言館は信州の上田市にある戦没画学生の慰霊美術館である。

美術学校で、あるいは独学で美術を学んでいたが、若くして戦没した画学生の遺品を集めた美術館である。

館長は窪島誠一郎氏（父は作家の水上勉）で彼は先にも「信州デッサン館」（若くしてこの世を去った画家たちの作品などを展示）を建てたが、画家野見山暁さんに賛同して、画学生の遺族らの遺作を集め平成九年に「信濃デッサン館」の分館として「無言館」を設立

した。

この「無言館」を訪れた人々の感激を日本中に広めたいという意図から各地で開かれた絵
画展の一つでした。

日立O B美術会に入会して

吉原 巖

永い歴史のある美術会に参加させて頂いていることを、誇りに思っています。

入会以来、四年、描く楽しみに加えて、観ていただくことの楽しみを感じております。

退職以後、顔を合わせることの少なくなった友人たちが毎回来てくれて絵よりもワインを飲みながら近況を語り合うのを楽しみにしている様子で他の方々に少々気が引けています。これからも、健康に留意して描く楽しみ、観ていただく楽しみを大切にしていこうと思っています。

末尾ながら当会の運営にご尽力下さる事務局、各委員会の皆様には心から感謝しています。

羽化（うか）

若狭 孝治

あたりが暗くなり、天敵が居なくなつた頃を見計らつて、懸命に幹を這い上がる。鋭い爪で葉っぱにしがみついた油蟬の幼虫は、やがて背中を割り、イナバウワよろしく頭を下にして殻から身体を外に出し、つづいて、腹筋運動によつて頭を上にして葉にしがみつくと、濡れた羽根を外に出した。

自治会の役員として実施した行事の一つ、「蟬とホテルと音楽の夕べ」でのひとコマである。田舎育ちの私にとって、見慣れた、とくに珍しくもない光景であつたが、なぜか今回は、わくわくしながらみつめた。永い地中生活を終えたのちに、蟬の最も弱い羽化のタイミングに外敵の攻撃から身を守るための知恵として、最適な時間と時期を慎重に選んでいくことを、知ったからだろうか。

フルートの演奏をバックにして、乱舞するホテルの観察で時間を過ごしたのち、蟬の羽化の場所に戻つた。濡れてくしゃくしゃだった羽は既に乾いて、やや薄青緑の白いはねを闇のなかに沈めていた。

私の絵画

渡部 崇

私の絵画の始まりは昭和二十六年四月に担任教師となった、後に春陽会の打田幸男先生の個別指導から始まる。油彩画を習い、マチスやセザンヌに感銘を受けた。

中学校も小学校と同じで推移し、高校に入学してからは岡田先生の指導を受け、デッサン等も本格的に習い、芸術系への進学を奨められたが、親の反対もあり、高校3年の春、理工系への進学に変更、大学受験で絵の方面は停止となった。

大学はどうやら工学部へ入学し、夏休みに帰省した二日目、父の急死に会い、大学生活が急変、親族・知人等の援助と奨学金・アルバイトなどでどうやら卒業、日立―（電サ）へ入社。

卒業記念等で友人と旅をした際にスケッチブック数冊を風景画で再開。

入社した年に絵画クラブを同好の数人で横浜市戸塚で始め、今に至っている。

日立の社員は仕事一辺倒で、定年後やることがない、と言わずに、是非、日立OB美術会に入ってほしい。

最近描き始めた人へのアドバイス（遺稿）

福原三郎

定年を過ぎてから絵を描き始めた動機はどうであれ、これからのライフワークとして熱心に全力投球される事を期待します。

美術書を読んだり、人の話を聞いたりすると美術用語がどんどん出てくる。自然科学をやった人は数理的に思考する習性があつて理屈っぽい。

美術は理屈でなくて、感覚で感じとる視覚芸術だから、それに使う用語の意味が理解しがたい。人によつて解釈は多少違うし、十人十色のニュアンスと思つてよい。

だから「自分なりの解釈」でビシビシ使つた方がよい。大切なのは経験を積み重ねると共に解釈を修正して行ける頭のソフトさだ。

さて、自分で描いたもの（未完成を含めて、むしろ未完成のうちに）を見て、以下の普遍的な用語を自問自答してみるとよい。

①モチーフ、②デッサン、③スケッチ、④エスキース、⑤タッチ、⑥形（フォルム・デフォルム）、⑦線、⑧面、⑨構図、⑩色（色相、明るさ、鮮やかさ）・・・

とりあえず十項目挙げたが、これを人に聞いたり、用語辞典を鵜呑みにして「知識」として覚えても感覚的に身につかなければ描くの役に立たない。絵は理屈で描くのではなくて

感覚で描くものなのだから。

少し進んだら次に例えば、⑪マチエール、⑫絵画性、⑬造形性、⑭空間感、⑮絵空事、等々も判ってくるだろう。

私は学生の頃から「うまい絵を描こうと思うな」、「よい絵を描くと心得よ」と教えられた。

これは六十年経って前者は画工というタレントのやることで、後者こそアーティストの道だと理解している。アメリカのモーゼル婆さんは七十歳から独学で絵を始め、一〇一歳まで絵を描いたが、その作品はクリスマス・カードに採用されて三五〇〇万枚売れた。

ケネデイは彼女を表彰した。彼女はこれらの金を寄贈した・・・と、朝日新聞社刊行「世界名画の旅」に高階さん（元、東大教授美術史専攻、現在、西洋美術館長）が紹介している。新宿、安田火災ギャラリーに彼女の作品が2点ある。何故にこの老女の作品が名画として好評なのか。

オランダのブリュッゲルは百姓だが、独学で絵を学んだ。「農民の踊り」「バベルの塔」等、好評の名画が沢山ある。何故好評なのか。二人の共通するヒュウマニテイーとは。

日高克昌は京大教授もやった医者だが、壮年のころ画家に転向した。彼は富岡鉄斎に入門を志して門を叩いたが「教えて学ぶべからず、学んで得べからず、自ら万巻の書を読み、

千里の道を歩め」と独学こそ正道だとして入門を許さなかった。その日高が後年、美術学校で講演し「うまい絵は成金の床の間に飾って金持ちの目を楽しませ、よい絵は読書人の居間に掲げて心の糧となる」、「前者は腕前の所産だが、後者は心の所産である」、「そして「前者の画工はゴマンといるが、後者のアーチストは数える程しかない」とも述べている。

この万巻の書とは美術思潮の変遷、芸術家の人生観や絵画論、語録等のことでHow toの技術書から得るものはない・・・と私は教えられた。

日立OB美術会の特別会員、故・林田氏はこの学校で日高の絵画論を学んだ。私は林田と四十年交際した。

最近「泥棒美術学校」という本で他人から盗め、他人を真似ろ、と説いている。それにはそれなりの技量がいる。「まねる」とは「まねぶる」で「まなぶ」の同源語である。トンボ文庫の「親と子の美術館」にも真似ろと教えてある。

特に奨めたいこと

① 描き急がないこと・・・一枚の絵をせっせと突っついて完成を急いでもよい絵は生まれない。

② なるべく大きいキャンバスと太い筆で・・・細い筆で小さなキャンバスに描くとチマ

チマして伸びやかさを失う。貧相な絵になる。

- ③ 仕掛かりを沢山持て・・描きかけに自問自答しつつ試行錯誤を繰り返して画想の熟成を計る。

- ④ 石膏像でもリンゴでも自分の顔や手足でも何でもよいから刻明な写生を繰り返して目の訓練、運筆の練習。美術学校では生涯これが続けろと教える。

- ⑤ 理屈っぽくないこと、もっとポエジーであること。

- ⑥ 町の銭湯の浴槽の上にあるペンキ絵や映画館の看板絵と我々が望んでいる絵と違う本質は？を考えること。

美大の先生の講評（「アトリエ」評論の紹介） 福原 三郎

女子美の研修生、卒業生の作品七十二点について、四名の先生が講評した記事が雑誌「アトリエ」四一四号にのっている。この本は今はないので参考になる点を抽出してコピーしました。参考にしてください。

（1）全体について

①カンバスに向かう前に対象に対する感動や興味を造形美として、どのように把まえたかという**意図（個性）を自覚**することがまづ、根本です。自然は無限に造形美を提供してくれるのだから、それを線や面や量や色で具体化し、組み立ててゆくという心構えが大切。総体的に一枚の絵を描くのに時間のかけ方が足りないと思われる作品が多い。作画過程の中でこれから絵を完成させてゆく大切なところで終わっている感じがする。つまり突っ込みが足りない。

②次に初めの計画の不十分さ、或いはデッサンの曖昧さ、形の決定の不十分なままに描き進めていくうちに、部分に囚われて最初の感興が部分的な興味に置き換えられて仕舞って大切な全体の骨組みを忘れてしまった感じの作品が多い。

③構図についても整理の不十分さが目につく。興味の分散から二つの画面に分かれている

ものもある。要するに描く前によく考えて**感興に中心をはっきりさせる**事が大切である。一つの画面に欲張っているいろいろの興味を盛り込み過ぎないように抑え、それが決まったらはっきりした態度で感興の中心に向かって形、色、タッチで攻めてゆくといった態度が大切。

④色については、えのぐに馴れていないせいもあるが、フレッシュさに対する注意不足もあってか、描いたり塗ったりしているうちに「なんとかなるだろう」といった風な色使いが濁りとなっている例が目立つ。特に陰の色の明るさを黒っぽく（ブラックやアンバー系）不用意に使っている例が多い。陰の色もはっきりと、**色として見極める勉強**をしてほしい。

⑤次にプルシャンブルーの乱用が目立つ。この色は不安定な他の色に影響の多い色で、避けた方が無難と思う。

（2）風景画について

①戸外で描くためもあったか、静物画、人物画に較べて時間的に不十分な作品が多い。一通り絵具を塗ったから終わったといった感じの作品が多い。もっとじっくり落ち着いて突っ込む努力がほしい。静物画や人物画に較べて物の位置や比例の誤りがさほど目立たないから、そうした不確かさが積み重なって曖昧で脆弱な作品になっている例が多い。それを

避けるためには、まず初めに大きく、骨組みを捉える事が大切で、逆にいえば細部の興趣に引かれて全体への配慮を欠く事がないように。部分部分がよく描けてもそれが全体としてあまり役に立っていないくて、反対に**画面全体の統一感**を損なっている作例が多い。

②取材の仕方はなんといっても感興点を絞ることが大切で、展望風景も悪いとは言わないが、絵ハガキ的な名所紹介風になりやすい。たとえ、何気ないありふれた場所でも**自分流に見据える**ことが大切で出来るだけ目標を小さい部分に絞って捉える練習も大事。

③緑の木の陰の色が概して汚く濁っている例が多い。木の繁みの塊の陰の美しさをよく見極めていないため、また、陰の中の明るさに対する不注意、及び明るい緑の中での変化をよく見ていないらしくて、みな一様のグリーンになっている例が目立つ。同じグリーンでも、コバルト系、カドミウム系、クローム系のニュアンスの違いも学んでほしい。

(3) 静物画について

静物画の素材は私達の身の回りに沢山あるが、それをそこにあるままの状態を漠然と描くのでなくて**物の形や質が空間的に捉えられて**いなければならない。

花と壺の作例が多いが、先ず、どういう風に配置し、どれくらいの大きさのキャンバスがよいかを考える。それは花の形や数や広がり、壺との関係などで決まるわけで、大き過ぎると画面を切り落とすことも出来るが、やはり**何枚も下絵で吟味して決めるのがよい**。

いくつもの素材を組み合わせるとき、数と量で空間を構成するのに、素材を自由に動かしてみよう。そのとき欲張って全体の統一を失う配置になり勝ちですから、一番描きたいものは何か、狙いはどれかをはっきりすれば構図はまとまります。そして個々のものはリズムとして生かしますが、そのリズムを統一した大きなまとまりが大切なです（注、起承転結）。

次に、制作に共通しているのは素材とバックとの関係が気になります。

この二者は地球と大気のように互いに関係しあって存在しているもので、バックが暗過ぎて不気味な穴ぼこ的であったり、逆に明る過ぎて突出したりします。これは素材とバックの色価（バール）に注意して、例えばバックに暗い、冷たい色を使ったら、その色を花や壺の暗い部分に使うとか、花の中にある色をバックにつけるとかして、繋がりをつけるのも一つの方法です。色を変える時は色紙などで色合わせをしてみるのもよい方法です。貼り絵のように、平面的に塗られた絵はよく対象を見ていないからで、よく見えているうちに何か限りなく広がる空間が感じられるものです。その空間を表現するのに、もったいりろいろな色を使ってみることです。一つの色相にも沢山の「色合い」があるのです。

静物画にはよくテーブルを描きます。テーブルを表現する直線や曲線は構図の上で重大な役目をするとは申すまでもありません。

これは素材の配置とそれを見る視角を変えてよい位置を決める入念な工夫が大切です。静物画ではこの視点が大切です。

(4) 人物画について

山のある風景を描くとき、遠景、中景、近景のどの部分を多く取り入れるかを考え、手前に木があっても山という中心に向かって動き（ムーブマン）とか変化で処理し中景の起伏の線も山の垂直に対して水平の面、斜めの面（奥行き）を意識して描く。山も面と面で出来る山壁の方向性や積み重ね、明暗、強弱も中景、近景と関係付けながら描く。こうして画面空間が構成されてゆく。人物画も同じで遠景、中景、近景がある。ところが目、鼻、口、耳など部分的な形に囚われて説明的になり勝ちです。大きなフォルムの中で顔や頭が遠景の山であるとの位置づけを忘れてはいけません。

人物は腕、脚、頭が一定のあるべきところについている為に風景画や静物画と違って自由度が限定される。従って静も動も色を除けばポーズだけで決まってしまう。ポーズは頭部、上半身、下半身の三つの組み合わせ方によって静や動の表情を掴むことが大切です。

腕と脚は表情を強調する役目をしていて、特に腕の位置、方向は画面構成の変化や動き、奥行き、アクセント等に大きな役割をはたします。腕は兎角手、指にとらわれがちですから、これらの関係を忘れないことが大切です。

人物ばかりに気を囚われなくて、周囲のものがあつての人物であり、椅子やバック等、周囲の物の存在との関連、つまり空間を忘れないことです。

空気に色がないから空間認識は難しいが、空間を物として解釈して画面を構成するんだという心構えが大切です。これは静物画についても同じです。

(5) 私見

① 四名の先生の総合評価ですから個人癖のない評だと思っています。

② 本文中の**太字**の部分は私が基本的に大事だと思ふところ です。

③ 美術学校で教わって一通り知識としてわかつていても実技として身に付いていない。やはり沢山描かなければ血肉とならないでしょう。

④ 血肉の感熱度は他人から批評されなければ判らないと思います。

⑤ 沢山批評して貰って、少しづつ自分の絵画感も育つてゆくのだと思います。

⑥ 先に述べた「起承転結」は漢詩の構成要素です。七言詩でも・五言詩でも四句ですが、この四句目を結句と言ひ、全詩意を総合する、このことで静物画もこの基本は共通だと教わりました。

⑦ (1) (2) (3) (4) に共通して底にあるものは、細部に囚われなくて統一された「立体感」とか「空間感」のことだと思う。造形絵画の基本だから。実景を見る時に目を

カッと開かないで、「瞼を閉じるようにして細目にして見なさい」との教えは細部が目立たなくなつて全体を統一的に大きく見られるからです。



HITACHI
SENIOR
ARTIST
CLUB